巣立ち

卒業記念文集(昭和 38 年 3 月)

鶴来小学校

※この文集は鶴来小学校昭和 38 年卒業生が、当時、思うがままに綴った文集です。
従って、漢字変換も当文集に記載されたままです。また、お名前、文書に打鍵ミス等
がございましたら、ご容赦下さい。

卒業生に贈ることば

――――自分のよさを伸ばそうーーー

村田　介男

いよいよ御卒業ですね。心からお祝い申し上げます。また、皆さんをお育てになられたご両親をはじめ、お家の方々にもお喜び申し上げます。

今回卒業される 138 名の皆さんは、それぞれちがった、顔かたちをしておられます。このように体も、心も、頭や手足の働きも違っており、一人ひとりに、それぞれの長所があり、他の人のまねのできない、良い点があるのです。この良い点を見出し、それを伸ばすことは自分として最も大切な事であり、他の人に対しても、良い影響を与えることになります。そして国や社会に対しても、勤めを果たすことになるのです。

ご存知のように、我が鶴来町の歴史は古く、風景が大変良い。そのうえ多くの人が立派な業績（いさお）を残されました。皆さんの体の中にはこの祖先の血が流れており、心が残っているはずです。どうぞ自信と努力をもって自分のよさを伸ばしてください。皆さんの前途に栄光が輝いています。

はなむけのことば

健やかで和やかで賢くあれ　南田　直一

いつも清らかな気持ちをもって、どんな時にも自分を失わず、一つ一つ目の前の望みを遂げていって、最後に自分の念願する大きな目的にたどり着かれるよう祈ります。

北川　与孝

現実をわすれぬ理想を持って常に前進せよ　中本　博子

何事も力いっぱいやりましょう　高鍬　敏之

踏まれても　寝ずよく生きよ道芝の　何時か花咲く　春のくるらん　福岡　克己

何事も、根気強く最後までなし致遂げる人に　小石　春栄

明るく希望をもって生きよう　谷内　善一

誰からも愛され信じられる人になろう　秋田　又衛

正しいことには勇気をもって進みましょう　山口　光枝

偉人は嵐の中に立つ　西田　忠雄

焦らず慌てず一歩一歩前進しましょう　橘　保子

強い意志を持て！　責任感の強い人になれ！　そして前進せよ！　堀　富士磨

月の世界へ旅行しなさい　江村喜久次

良い本を沢山読んで心の糧にしましょう　平岸　節子

人生有意義に、身体に気を付けてね　小森　秀子

口先だけでなく実行力のある人になりましょう　藤島サチ子

まず健康　本田登代子

友情は信頼の上に立つ　東　真喜雄

に明るく健康で、一日一日をしっかり過ごしましょう　滝本　寿英

一組

内藤　秀幸
山元　敏晴
酒井　　達
中村　広司
野村　　実
小石　正幸
粟田勇紀夫
畑　　信明
藤本　聖一
小石　満則
谷端　万亨
寺田　　仁
長森外喜夫
小西　秀信
佐野　良治
入場　昭雄
山崎　博樹
沢田　和祐
尾島　和男
戸田　　隆
又　　俊和
中田　光義
村上　一次

北川　清美
北村　賢美
山岸　栄子
谷口　博子
山形　悦子
山田　清江
松本たか子
森山恵美子
小坂千栄子
安田　歩美
柿　小柄子
魚住美千代
西田千津子
高田　敬子
徳田　明美
尾山真知子
山岸真知子
坂上とよ子
木下　米子
浅井美代子
山本久美子
三宅　路子

二組

米田　雅春
谷口　信一
小西　末男
戸田　順次
橋本　　豊
樫田　幸夫
寺田　正博
成田　幸一
辻　　順正
橋場　　茂
山田　孝則
吉岡　文雄
村田　俊治
常山　輝夫
畑　　雅克
館　　秀明
大崎　和夫
吉村　照夫
鈴木　　衛
舛田　　明
三国　仁司
常岡　　進
麻木　啓二
松本　武夫

杉田　夏代
梶　喜美子
北村裕見子
藤本　詠子
松田　照代
今西　啓子
吉本　慶子
南谷真理子
作田　純子
富田　　了
山形加代子
清水真希子
佐藤美枝子
吉川　幸子
山岸　好恵
山内陸奥子
谷口　康子
浦　　洋子
山崎　澄江
木呂場洋子
坂　美栄子
東田美智子

三組

内尾　祥映
小路　徹雄
織田　勇雄
坂井　隆雄
土田　政明
織田　春樹
井上　　章
早瀬　克人
榊原　真澄
土谷　俊幸
高畠　　勇
中村　　章
加藤　昭二
後　　重晴
中木戸英夫
中田観世音
表田　　勇
織作　峰生
根崎　明義
中村　久幸
宮　　要介
小山　誠一
山崎　三郎
山橋　二郎
山本　峰三

大崎恵美子
安田千代子
北　登代子
酒井外志子
山本るり子
仲村　澄子
加藤　正子
一鉄小百合
作田とし子
片岡　光子
北出　直美
山岸　久枝
喜多美千代
宮岸千賀子
藤場真理子
辻　　一代
山本千恵子
長田　和子
車　真知子
上田　一枝
密谷　春枝
松村　道子

ひとり一言(6年1組作品)

よいいこと、わるいことをよく判断して行動して下さい。　内藤　秀幸

何事にまけない、たくましい人間になりたい。　山元　敏晴

意見がわかれた時、最後まで言い合い、そしてほんとうの仲よしになる。　酒井　達

ぼくは一年生の時から、あまり成績がよくありませんでした。中学生になったら、勉強して成績をよくします。　中村　広司

中学校に行ったら、おおく勉強したい。　野村　実

いいこととわるいことをはっきりくべつしよう。　小石　正幸

ぼくはそうじが大きらいで、よくさぼったものだ。五年生の皆さんはまじめにして下さい。　小石　満則

中学校へいったら、うんと勉強して、上の学校に行きたいと思います。五年生の皆さんもがんばって下さい。　粟田勇紀夫

ぼくたちはそうじをまじめにやらなかった。五年生のみなさん、古い学校を少しでもいい学校にして下さい。　畑　信明

中学校へ行ったら、算数をもっと勉強したい。　藤本　聖一

僕は一年から六年までまじめに勉強しなかったが、中学生になったらまじめに勉強したいと思います。　谷端　万亨

五年生の皆さん、ぼくはあだながいちばんきらいです。六年生になってもぜったいあだなをいわないでください。　寺田　仁司

中学生になっても、これまでの経験を生かして、よき中学生になろうと思います。　長森外喜夫

ぼくは中学校に入ったら、よくわからなかった勉強をしっかりしていきたいと思う。　小西　秀信

そうじようぐの整理がうまくいきませんでした。五年生の皆さんお願いします。　佐野　良治

今年の五～六年生の皆さん、温室のていれをたのみます。　戸田　隆

六年も最後になったけど、中学生になってうんとうんと勉強して、えらい人になりたいと思っている。　又　俊和

五年生の皆さん、より良い児童会をつくって下さい。　中田　光義

中学校になってからいっしょうけんめい勉強して高等学校に行きたい。　村上　一次

下級生の皆さん、さむさにもあつさにもまけず、しっかり勉強して
運動にもはげんで下さい。　北川　清美

いつまでもいつまでもみなさんと仲よくしたいと思います。　北村　賢美

私は毎朝のようにお茶当番におくれてきました。五年生の皆さん
おくれないでください。　山岸　栄子

五年生のみなさん、私たちはあまり下級生のめんどうを見なった様ですから
あとをお願いします。　谷口　博子

卒業してもみんなではげましあって行こう。　山形　悦子

園芸がうまくいきませんでした。五年生のみなさんあとを頼みます。　松本たか子

先生がた六年間の長い間ありがとうございます。私たちは小さい学年
の子のめんどうをあまり見ることができませんでした。
五年生のみなさん、よいお姉さんになって下さい。　森山恵美子

校舎が古いからそうじのとき、とげがささらないようにね。　小坂千栄子

下級生のせわをあまりうまくできなかったので、五年生のみなさん
うまくやってください。　安田　歩美

音楽室の楽器がいたんでいます。みんなで楽器を大切にして下さい。　柿　小柄子

わたしはとてもわがままなので、中学校へいったらなおそうと思おう。　魚住美千代

私は小学校のときはわすれものをとくにしたので、中学校へ行ったら、
とくに遠いのでわすれないようにしようと思う。　高田　敬子

五年生のみなさん、図書の本をどんどん読んで、大いに勉強して下さい。　徳田　明美

五年生のみなさん、私たちはあまり週番のおしごとが、あまりうまく
できませんでした。五年生のみなさん、あとはしっかりたのみます。　尾山真知子

下級生のみなさん、私たちの六年の時のような子にならないで、
しっかり勉強して下さい。　坂上とよ子

図書室の本をたくさんよんで、りっぱな人になってください。　木下　米子

冬はスキー、夏は水泳で、うんと体をきたえ、おおいに勉強し
明るく、ほがらかな人間になりましょう。　浅井美代子

手取川の水のように、清く、たくましく、生きよう。　山本久美子

わたしは算数がよくできなかったから、中学校へ行ったら、
いっしょうけんめい算数の勉強をしたいと思います。　三宅　道子

作　文

子　犬　　山崎　博樹

　去年の夏黒い犬が家の横にすててありました。その犬をつれてきてそだてました。それからいく日かたったときとうちゃんが、古川にいくとき犬をつれて古川にすててきました。そのときぼくは学校でべんきょうしていたので、そのことはしりませんでした。学校がおわって家にかえたらクロがいませんでした。それでおかあさんにきいてみたら、おとうさんがすてにいったときいたので、ぼくは少々かなしみました。それでぼくは口をきかんとこうかなと思いましたが、すぐにきいてしまいます。それでその夜はクロのことを思い出すと少々なみだがでてきました。あさになったらおかあさんがすててきたものはしかたないといいました。それでもクロのことはずうっとわすれませんでした。

ぼくの弟　　酒井　　達

　ぼくの弟はとてもかわいい。いまは四才である。名前は、達美。ぼくはター坊とよんでいる。「酒井達美君」とよぶと、大きな声で「はあーい」とこたえる。「すもうしよう」といつもいう。すもうとりのまねをして塩をまくまねをする。ぼくはいつも負けてやる。ぼくが勝つと口をとがらしておこる。　きょうは「だれとねるがや」ときくと、「にいちゃんと」と言う。とこにはいっているといつの間にか母のところに行っている。
　また「本を読んでえ」と言う。ひざにだっこして一さつ読むと「もっと、もっと」とせがむ。しかたなく読んでいるといつの間にかねむっている。とてもかわいい。
　しかし、それはそうぞうである。ぼくは姉と二人きょうだいである。

かあちゃん　　内藤　秀幸

　ぼくはかあちゃんのてつだいをうんとして、幸福にしてやろうと思います。なぜかというと、ぼくはかあちゃんの仕事、つまり会社づとめのほかに、せんたく、そうじ、ごはんの用意、おちゃわんあらい、かい物など一から十まで全部したことがない。もしも全部したとしたら、一日であきるだろう。でもかあちゃんは毎日している。つらい日もあるだろうと思う。だから少しでも、てだすけしてやろうと思う。それにぼくももうすぐあにきになるとかで、なおさらてつだわなければならない。おちゃわんあらいやそうじはかあちゃんの体のぐあいの悪い時など、たのまれるが、なかなかするきにならない。おつかいだけはしかたなくする。それもたくさんいいつけられると、一つや二つはわすれる。この欠点は本人のぼくもよくしっているが、なかなか、なおせない。
　中学生になっての方針、および計画の中にとりいれようと思っている。

け　ん　か　　村上　一次

　栄子とさよ子とすぐけんかする。栄子はすぐちょっかいをかけて「だら、だら」といってなく。かあちゃんも「栄子だらやざ、ちょっかいかけてはなかされる。こんなだらおらんわ」といった。とうちゃんも「この子やくせんこやもん」といってしかる。なぜけんかしるのか栄子だらやなと思った。もうすこしものを考えてけんかのない家にしたいと思った。

ガラスをわった時　　野村　　実

　ある日のこと、やね雪をおろしていたら、スコッパが天まどのガラスにあたってガラスがわれた。全部われたかと思ったら、すこししかわれていなかったので、われたとこだけ雪をのせた。ガラスをわったのでやね雪をおろすのがいやになった。そして下におりてかあちゃんにいったらわろた。
　それからしばらくたって、はれてきたので、われたところだけなにかあてようと思ったが、てごろな物がないのでやめました。

大　雪　　沢田　和祐

　ことしはたいへんな大雪で屋根の上までつもり、ぼくらはいつもこの上を歩いていました。ぼくたちはいままでにない大雪で、めずらしいやら、おどろくやらしました。　ぼくの家でも三回屋根雪をおろしました。こんなにたくさんの雪がどうなるかと思っていたが、自衛隊の除雪隊がきて通りはみんなよくなりました。　ぼくは思ったより早くよくなったので、これもりっぱな機械があるからだと思いました。

お別れ　　谷端　万亨

　ぼくたちはもうこの学校や先生やみんなとお別れだ。それに、いままで、いっしょなくみであったのも中学校になったら、ばらばらになるかもしれません。そういうことを思うと悲しくなりました。でもしかたありません。去年の六年だってこういう思いをしたでしょう。

これからは　　寺田　　仁

　除雪作業をしていて、そりで雪を川へ流していてから、坂になっている所から人を一人乗せて行ったとき、ちょっとのショックで乗っている子がたおれて前へつっこんで、ころんで、鼻血を出してしまった。ぼくはたいへんだと思って、すぐ家へつれて行ってやって、鼻紙でてあてをしたら、すぐ血がとまったから除雪作業を始めたが心配で心配で仕事がはかどらなかった。そしてすこしたってから、その子が除雪作業を見に来た。ぼくはむねがスウーッとした。
　ぼくはこれから、こんなふざけたまねをしないことにしようと思っている。

想い出　

山元　敏晴

去年の四月、六年に進学したとき、「とうとう最終コースにさしかかったぞ」と思った。そして、四月には遠足があった。（獅子吼高原）から（月惜峠）（堂）（後谷）方面へ行ってきんけん神社の所へ下りた。そのときのありさまは今でもハッキリおぼえている。

そのころ獅子吼にはまだ白く雪がのこっていたし、友達などと（みょうが）（あさづけ）（せり）などをたんぼの（あぜ）やスキー場へとりにいったこともあった。ようやくゆきがとけたそのころは、雪の下から出てきた土･･･その土がみょうになつかしかった。

五月になって旅行があった。その旅行で水族館などいろいろめずらしい物をみた。カブトガニがあんがい大きいのにおどろいた。

六年でいちばん楽しかったときは、四月と五月・七月・十月だった。そのころ学校では行事も沢山あった。そして勉強も活発だった。

八月の夏休みには、良い想い出になったこともあったが、又つらい想い出もあった。

○ラジオ体操の帰り、ウナギをつかんだこともあった。
○内尾村の千丈でキャンプしたときもあった。
○あせをたらたらながしながら写生したこともあった。
○兄たちが帰って来て再び行ったこと。

それらがじゅんばんになって次から次へとうつりかわっていった。時間というものに、おいぬかれたような気持だった。ようやくおいついたと思ったときは、六年もあと五か月になっていた。一日が、とてもみじかく思うようになった。

そのことをうまく言いあらわすことは出きないが、夜ねることになって「あゝ、もう今日は終わったんだなあ」という気がした。

運動会のときも運動会をするのがとてもおしくおもわれた。終わった、さんねんだった。小学校最後の運動会が終わったのだと思うと卒業が間近に思われた。

お正月は・・・やっぱり楽しかった。兄が三人とも帰ってきた。それがなによりもうれしかった。

三八・一豪雪　　まるで今年の卒業を祝うかのように。あまりありがたくないはなしだが。でもおかげで今年はスキーがだいぶやれそうだ。

今から思い出していくと、この六年間のさまざまな出来事がアルバムのようにぼくの「きおく」の中にある。

そしてこれからも、もっと大きくたくましく成長したい。

私の犬　　尾山真知子

うちの犬はころです。いつも夏になると山へあそびにつれていってもらいます。あなぐまをみつけました。ころはあなぐまをほじってもとどかなかったので、あなをふさいでしまいました。そして昼になると、おにぎりをやると一つは食べます。がもう一つはあなをあけて、うめてしまします。

うちのネコ 山形　悦子

私の家には、ネコがいましたが、いまはいません。それはネコがおしりからちをだして家の中でオシッコをするので、やんちゃだから、とうちゃんが「すててこい」といいました。だからしかたがないので、かあちゃんがすてて来ましたが、ネコは又もどってきました。それから二、三日後、学校から帰ってきたらネコがいません。とうちゃんにきくと「すててきた」と言いました。私はとてもかなしかった。もう死にそうなネコを思うと、なかずにはいられませんでした。ネコはそのままもどって来ませんでした。

今までわすれていたネコのことが、私が卒業するころにふと思い出されるなんて、不思議なくらいだ。

けんかをした時 三宅　道子

私が五年生の時でした。私の友だちと十字路をして遊んでいたら、あい子ちゃんと、とよ子ちゃんが十字路のじゃまをしたので、私が言いつけてやったら、なお、おもしろがってじゃまをしました。そして、まりちゃんとあい子ちゃんとけんかをしていたら、まりちゃんが負けていたので、私はムシャクシャしたのであい子ちゃんをおしました。そして私とあい子ちゃんとけんかになりました。

すこしたってから、けんかが終わりました。そしてとよ子ちゃんとあい子ちゃんが私たちにあやまりにきましたが、私は許してあげませんでした。

図画を見られた時 魚住美千代

六年生になってから、天狗橋へ写生に行った時。あっちの方で柿さん。木下さんの絵を小坂さんたちが見ていたので、私もそこへ行たっら小坂さんが私にいやがらせを言ったので私はまけおしみを言って橋の方へ行きました。そしたら、柿さんたちが私の絵の方へ行ったので、私もそこへ行くかなと思ったけれど、又いやがらせを言われるので行きませんでした。すると柿さんが「ミー、魚住さん」と言いました。私がだまっていたら又柿さんが「絵、見せてもらった」と言いました。私は小さな声で「柿さんは私が見に行ったらおこるくせに、人の図画かばんから、こっそり絵をだしてみるなんて、どろぼうみたいだ」といった。

その時、私はくやしくて涙が出そうになりました。

「想い出」　　柿　小柄子

本だなの中に日やけした詩集がはいっていた。見たら、四年生の時のものだとすぐにわかった。中には、私の詩、友だちの詩などのっていた。今では組が別な人のもちゃんとのっていた。

この詩集はたくさんの思い出をもっている。この中にのっている私の詩は、一度かいたのがだめだったので、お友達の山岸さんに書くのをまってもらった。山岸さんのは「目ざまし時計」という題で出ていた。あの時は私と山岸さんは親友どうしだったが、今では組が分かれているので、時々顔を見合わすだけだ。

こうして考えて見ると、いろいろ想い出がわきおこってうる。静かで、おしとやかな、山本さん。この人とも今では顔を見合わすだけだ。けれども六年になってできた友だちもいる。魚住さんだ。

こんな事を思い出したのも、あの古い詩集のおかげだ。この詩集をいつまでも大切にもっていよう。私たちはもうすぐ中学生だ。中学になって、また、思い出したら読もうと思う。これまでの六年間の思い出を。

思い出　　山岸　栄子

私がこの町にこして来たのは、二年生の一学期の中ごろで、二学期になって鶴来小学校へ通いました。始めはとうちゃんに送ってもらって、みんなといっしょになって、夏休みの宿題を出しに行きました。先生は向井先生でした。

始めは友達がいなくて、まどの所で、だまって立っていると、今二組のなり田くんが「来る」という字をゆびさして私に「あれ読めるか」と言ったので私はだまってその字を見ていました。そしたら長いつめをした、なり田君は私の手をつねりました。その時てから血がでました。

その時から私はとても、なり田さんが、きらいになりました。

屋根雪おろし 　森山恵美子

毎日休まずに、ふっていた雪がふりつもって、三十日ごろから、朝、昼、夜、とやすみなく、ふりつづいた雪で、あらゆる交通が不通になってしまいました。

お父さんも仕事に小松に行って帰ってこられなくなりました。お父さんがいないので、私とお母さんと毎日、屋根雪おろしをしました。初めて屋根へ上がる日、はしごに登った事がないので、おそろしくふるえながら上がりました。もうあと二だんめほどで、しばらく休んでいました。

やっとなれてあまりおそろしくなくなったので、お母さんに手を引いてもらって、やっと上がりました。上がってみると、さかなのでおちそうな気がしました。けれどもがまんしてあるいていたら、だいぶなれました。

スコッパで雪をほるたびに、雪といっしょに下へおちる気がした。心の中で「おちないように、おちないように」といいました。一時間ほどしたら、屋根になれて屋根にいるのがおもしろくて、あっちへ行ったり、こっちへきたりして屋根雪をおろしました。空がうす暗くなったので、屋根の上で妹の利美に「何時や」ときくと、妹は下で「もう六時や」と大きな声で言ってくれました。私とお母さんはくたくたになって屋根からおりました。下のしまつをしなければなりません。お母さんが「ここはあすにしよう」と言ったので、屋根から家にはいりました。

三十日の夜、急に川の水がふえて、ゆか下まで水がつきました。こたつの中も水が入りました。家から下の家は、たたみをまくり、にもつをみんな二階にあげていました。九時ごろ、お母さんが下の家へ見に行ったらみんな集まって、川の雪をすかそうと言う話をしていたそうです。大通りの家の人たちにも手伝ってもらって、夜中の一時ごろ、やっと水がひきました。私も妹も、その日はおそろしくて、ねむれませんでした。

手にのせればジュッと、とける、やわらかい雪がこんなに大きいひがいを出すとは思いませんでした。

古宮公園の思い出　高田　敬子

スッスッと私はペタルをふむ。冷たい空気の波をおしわけると、空気が水のように感じた。六年生の夏休みに自転車にのれるようになったのが、うれしくて朝のラジオ体そうが済んでから毎朝、自転車で古宮公園へ散歩にいった。まだ早いので人や自動車も少なかった。

今町を通りぬけると、のぼり坂になるので、おりて公園までいった。線路のそばで、さるのおみやげに、いたどりの葉をたくさんとる。公園には、だれもいなく、自転車をとめるとブランコに走っていき、とびのり、力いっぱいこいだ。とても気持ちがよかった。しばらくのっていると、男の人が犬をつれて散歩に来た。なんだかじゃまされたみたいな気がして、和佐谷の橋の上へ行った。私は、ここからのながめが大好きだ。大きい岩がいっぱいならんでいる。深く青い川。公園の下のがけに、はえている木々。それが美しく水に写っている。遠くに見える山々、みんなが写真をみるように美しい。

時間のたつのを忘れて、ながめて、公園にもどった。おさるの小屋に行くと、何かくれるのかと思って、かきわけて、よってきた。私はいたどりの葉を自転車の上からとって、さるにやった。とてもおいしそうに食べる。とくに、子ざるの姿が今でも目をつむると、はっきり思い出す。おそくなって母にしかられたこともあった。一年生の武部のジュンちゃんを後ろにのせて行ったこともあった。

小さな古宮公園、私は大好きです。

卒　業　　徳田　明美

一年から六年までならってきた先生と、お別れするのがとっても悲しいです。
私は、こないだ五年生みたいな気がしますが、早中学生になります。小学校の時、みんなと遊んでいました。けれど、中学になりますと、その人たちと遊べませんし、その人たちとも、ばらばらになります。でも私は中学生になりますから、いしょうけんめい勉強したいと思います。そして、小学校の時は家から学校まで遠かったけれど、中学校になりますと、近くなります。けれども私は六年間かよった小学校がいいです。でも、お母さんは「中学になるさかいに、いっしょうけんめい勉強しなさい」と、いつも学校に行く時いいます。そして、じゅぎょう中いつもそれを思い出します。でもいつまでも小学校にいることはできません。ですから、いっしょうけんめい勉強したいと思います。

卒　業　　木下　米子

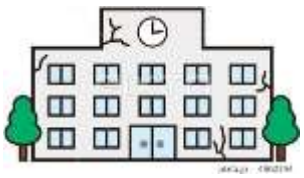
卒業がだんだん近くなった。卒業を目の前にして、今、一番いそがしい。又、勉強をしっかりとしなくては、ならない。卒業から中学へ進学する。春休みの間に六年の復習をしなくては、ならない。しなかったら中学校にいってまぜこじゃになってしまうから、今のうちに、しっかり勉強している。

詩

わたしたち　　三宅　道子

わたしたちが、中学を卒業したら、働きにいくもの、高校にいくもの
みんなばらばらになる　また、いつか、あえるかしら

学　校　　山本久美子



この学校、おじいさん、おばあさんの出た学校
とても想い出のある学校
私たちの子供がでる時は、もうなくなっている学校

おとなになってから　　木下　米子

おとなになってから、また、どこかで友だちとあうだろうか
おとなになってから、友だちがどんなかっこうをしてたずねて、来るだろうか

赤ちゃんの手　　山田　清江

赤ちゃんの手は、小さい手、私とくらべものにならない
赤ちゃんの手は、ちいさくて、かわいらしい手
私の手は、大きくて、ふとっている手
赤ちゃんは、生まれた時や半年たった時、手をまるめている
おふろに入って、手をひろげてやると、手をじっとひろげている
赤ちゃんの手は、小さくてかわいい手

雪　　西田千津子

雪は、あちらこちらから、ちらちらふってくる。
こうりのようにつめたくて、おどりながらふってくる。
年よりにとっては、いやなものだ

わたしたちの学校　　小坂千栄子

私たちの生まれてこない、ずっと前からあった学校
いまでは、おじいさん、おばあさんのように、よろよろな学校
私たちと、六年間いっしょにいた学校
学校はくじけないで、たっている
学校は卒業していく、私たちをどう思っていてくれるだろう？
やがて、新校舎が立つと、この学校はどうなるのだろう？

あかちゃんの手　　松本たか子

ちいさなふっくらした手、それはあかちゃんの手
つよくにぎって、ないている
大きな手に小さな手
なにかくらべっこしてみたいきもちで、私はみていた

春　　北川　清美

はやく春が、こないかな
春が来たら、つくしなどが顔を出してくる
私たちは、もう卒業だ
これで小学校とも、おわかれだ
でも、また、いつかは、あえるだろう

屋根雪　　安田　歩美

むかいどうしが前へ、屋根雪をおろすので、
家はみんなうまってしまってわからない
どこを見ても銀世界だ

ス　ズ　メ　　山岸真知子

空は、いいお天気だ
スズメが二羽たのしそうに、遊んでいる
でも、私は、ひとりぼっち、さみしくてたまらない
でも、あのスズメを見ると、なんだか気持ちがうきうきしてきて
さむさなんか、忘れそうだ

うつらなくなったテレビ　　浅井美代子

急にうつらなくなったテレビ
いっしょうけんめい、うつそうとしたけれど、うつらなかったテレビ
姉がうつそうとしたら、しばらくうつったが
すぐ、うつらなくなったテレビ
母もうつそうとしたが、やっぱりうつらなかったテレビ
ガチャガチャやっているうちに、急にうつったが
すぐまた、うつらなくなった
こわれてしまったのかしら？

雪　　藤本　聖一

「大雪だ」といったころも、史上最大の大雪だった。
卒業を目の前にたいへんなことになった
けれど、ぼくたちは負けなかった
そして、がんばって、とうとう雪に勝った

卒　業　　小石　正幸

この六年間、先生におこられた日も、ほめられた日もあった
宿題をしてこなかった日も、わるいことをした日も、おこった先生
百点を取った日も、ぎょうぎをよくした日も、ほめた先生
でも、中学校へいっても、ほめたり、おこったりする先生がいる
中学校へいっても、ほめられる方をえらんで、勉強する

あ　ら　れ　　佐野　良治

ぼくの家に、あられがふった
ばらばらとふった

卒　業　　畑　　信明

ああ、卒業か、なんだか胸がわくわくしてくる
そう思ったとたん、どこかで、うぐいすがないているような気がする
こよみの上では、春だが、雪はまだやみそうにない
でも、早く雪がとけて、春が梅のまんかいでうずまり
ぼくらは卒業して、りっぱな中学への道へ進みたいものだ

卒　業　　小石　満則

学校へ入って六年間勉強してきたが、すこしみじかい気がする
その六年のあいだ、ならってきたことを中学校で復習する
中学校へ入ったら、小学校より短いので、小学校の倍、勉強したいと思っている
中学校へ入ったら、もう春になっているので、うぐいすのきれいな声が耳にはいる
又、きれいな桜の花が、まんかいでうつくしい
ぼくは、それをまっている

へんな気持ちがするだろう　　山元　敏晴

中学校へ入ったら、今までとは反対の道だ
六年間歩みつづけたこの道、毎日かよったこの道も、あんまり通らないだろう
その時は、へんな気持ちがするだろう
父母が中学校に入ったら、ぼうずにしろ、といった
今までのばしていたかみを切ってしまったら、きっと、へんな気持ちがするだろう

どちらが勝つか　　酒井　　達

ぼくの頭の中で、ボクシングがはじまった
勉強がテレビをボディーでたおした
テレビが立ち上がった
テレビのパンチが勉強にとんだ
勉強もまけずにパンチをおくった
勉強とテレビの熱戦がつづく

道　　長森外喜夫

道・道・道、道はどこまでも続く
広い大きな道が、山道・坂道・いばら道、どこまでもつづく
ぼくの進む道
山道・坂道・いばら道、一歩・一歩、しっかりした足どりで歩く
足がいたくなろうと、つかれようと、その場に一歩もたちどまってはいけない
道・道・道、道はどこまでもつづく
けわしい、けわしい道が

息　　谷口　博子

私が、ハァッと息をはいたら
白い息が、まわりながら前へ流れて行った
私が、おもしろくなって、なんかいも、ハァ、ハァ、としていたら
なんか、よく似ている物に気がつきました。
それは、えんとつでした
えんとつのけむりも、この息のようになっていました
そして、私が、口に手をあてて、ハァとしていたら
手がぬれてしまいました

雪おろし　　中村　広司

屋根をみると、雪がたくさんつもっていたので
ぼくと祖父が屋根に登って、力いっぱい雪をなげた
ぼくの顔には玉のような汗が、ながれる

先生ありがとう　　北村　賢美

日は進み、月は流れた
はや六年間は過ぎた
先生ありがとう
四月からは中学生
今日までの教えをかたく守って、良い中学生になります
先生ありがとう
本当に、本当に、ありがとうございました

春　　入場　昭雄

学校からの帰り、雪道を歩いていたら、急に音がちがってきた
なぜだろうと下を見たら、土がみえた
ここにはもう春が来ているんだ
そして、さっきふんできた雪の下にも、もうすぐ春がくるのだろう

俳　句

山ゆけば　空は青空　うつくしい　　中田　光義

学校の　庭に花さく　さくらかな　　佐野　良治

冬の朝　長くさがるよ　つららかな　　粟田勇紀夫

うぐいすが　うめにとまって　ないている　　谷端　万亨

ものごとに　しっぱいしても　くじけない　　柿　小柄子

はらはらと　来た日がいつか　すぎるなり　　坂上とよ子

雪とけて　早くこいこい　春の日よ　　浅井美代子

六年も　もうあとすこし　あとたのむ　　又　　俊和

ふぶきの夜　オーバをたてて　歩く人　　小石　満則

うめがさき　ぼくもとうとう　卒業だ　　小石　正幸

大雪や　どこもかしこも　雪の山　　内藤　秀幸

大雪や　のみにいけぬと　父の顔　　酒井　　達

ブルトーザー　高い雪山　くずしゆく　　大崎　昭雄

ひとり一言（6年2組作品）

中学生になったら、小川幸三先生みたいに、りっぱな人になろう。　米田　雅春

一年生のとき、ジープで足をおったとき、みんながみてくれたことを
いつまでもわすれません。　谷口　信一

ガラスのそばの雪をとっていたら、ガラスがわれたので、あやまった。しかられると、
思っていたのにしかられなかった。　小西　末男

中学へ行ったら、野球がじょうずになりたい。
そして高校、大学へいってプロになりたい。

戸田　順次

ぼくは中学校でうんと勉強して、お金をためて、世界旅行をしたい。　橋本　豊

五年生の皆さん、入学する一年生のめんどうをみてください。　樫田　幸夫

ぼくは算数が得意だ。中学校へ行ってもがんばりたい。　寺田　正博

橋本君にデンスケといったのは、ぼくだった。ごめんね。　成田　幸一

ぼくはよく、わすれ物をするから、なおそうと思う。　館　秀男

五年生のみなさん、ぼくたちはあまり変わったことはしませんでしたから、
みなさんで変わったことをしてください。　橋場　茂

中学にいったら、じゅうどう部かすもう部にはいって、
いっしょうけんめいがんばって、強くなりたい。

山田　孝則

ぼくは小学校のあいだ、ぼうりょくばかりふるっていたので、
先生にも友だちにも、すまないとおもっている。　吉岡　文雄

ぼくは六年かん、あまり本をよまなかったので、中学生になったら、うんと本をよみま
す。　村田　俊治

ぼくは、雪どかしをしていて、おうせつ室のガラスをわりました。すみません。
畑　雅克

館君にいつもぼくから、ちょっかいかけてたたきあいしていたことを
館君にわるかったと思った。　辻　順正

ぼくは、学校の物をよくいたましました。六年の時、先生におこられてから、いたまさなくなりました。五年生のみなさんはそういうことはしないで、学校の物を大切にしてください。　吉村　照夫

この学校は古いが、いまから六年や一年になる子は、新しい学校にはいれる。
ざんねんだ。　鈴木　　衛

ぼくが、病気で、そうじができなかった時、みんな何もいわずにそうじをしてくれた。
このことはわすれない。　舛田　　明

心に太陽を持て、ということばがあるように、ぼくたちも心に太陽を持ち、大雨にも、
台風にもまけずに、明るく元気な中学生となり、世のためにつくそう。　三国　仁司

ぼくたちの組のカーテンはのれんみたいなので、四月にはいった新しい組はこんなことをしないでください。　常岡　　進

中学にいったら勉強がむずかしいから、もっと勉強しなければいけない。　麻木　啓二

子供会がうまくできませんでした。五年生のみなさん、良い人をえらんで
良い子供会をたのみます。　松本　武夫

大雪の日、庭の木の枝がポキッポキッと折れる。竹だけが折れずにたっている。
杉田　夏代

外国語の勉強して、世界を一周してみたい。　梶　喜美子

五年生のみなさん、六年生になったら、しっかり、勉強して下さい。
わたくしも、中学校に行ったら、英語をしっかり勉強します。　北村裕見子

中学に行ったら、しょどう部にはいり、そして大きくなったら習字を教えたいと思う。
藤本　詠子

努力しないものは、人間ではない。努力してこそ人間である。　松田　照代

私は五年生の時に先生に、一どもしかられたことがありません。
のこって勉強をしていきました。　今西　啓子

私たちは小学校を卒業するけれど、又、かわいらしい一年生が入ってくる。
五年生のみなさん、一年生の方をたのみます。　吉本　慶子

一しょうけんめいに勉強し、りっぱな人になろう。　南谷眞理子

私は、中学生になったら、英語をしっかり勉強しょうと思っている。　　作田　純子

いまの学校がふるいので早く新しい学校をたてる方がよい。

富田　　了

下級生のみなさん、もっと学校をりっぱにしていって下さい。　　山形加代子

私は、社会でならったエジプトにきょうみがあります。大きくなったら、行ってみたいと思います。　　清水真希子

私は、三年の時から衛生部を続けました。でも三学期のある中で、一回くらいは整理部になった事があります。　　佐藤美枝子

私は、中学校に行って理科をしっかりやって、かんごふになりたいと思っている。
吉川　幸子

私たち、六年生は、新校舎に入れなかったので、たいへんざんねんです。　　山岸　好恵

私は、吉本さんにもらった手帳をわすれません。　　山内むつ子

五年生のみなさん、今度入ってくる、一年生を私達のかわりに、かわいがってください。
谷口　康子

はきはき、はつげんできなかったから、中学生になったらはきはきしょうと思う。
浦　　洋子

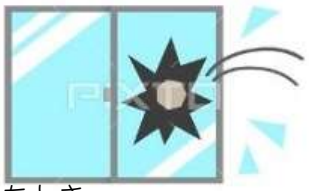
どんなことがあってもがんばって、りっぱな人になりましょう。

山崎　澄江

五年生のみなさん、下級生をいたわってあげて下さい。　　木呂場洋子

六年の一学期の時、六年全たいで、白山こうみんかんへいった時に、私が、今西さんのあだなをしらんといってしまったときに、今西さんが、しらんだんなら、だんねがにしてあげるといいました。今西さんありがとう。　　坂　美栄子

五年生のみなさん、私たちは中学校に行っても、いっしょうけんめいに勉強しますから、五年生のみなさんも、いっしょうけんめい勉強してください。　　東田美智子



作　文

ガラスをわったとき　　米田　雅春

　五年生のとき、先生が「テストを書いたものは、あそんできてもいいよ」といったので、ぼくは、ドッチボールを持って、南ひかえ所へ行きました。
　ぼくは、へいにあてようと思って、ボールをなげました。ぼくは、五、六回してやめようと思ってなげました。すると、手がすべってガラスにあたってしまいました。ぼくは、先生にあやまってこようと思ったけれども、勇気がでないので、ぼくは、水のみ場へ行って、水をのんで、しょくいんしつにいったら、藤島先生がいたので、勇気をだしてあやまりに行きました。
　そしてら、先生が「これから、そんなことをやめなさい。ガラスをかたずけなさい」といいました。ぼくは、これでやっと、すうっとしたと思いました。それから、すぐにガラスをかたずけて、教室にいきました。

大　雪　　谷口　信一

　ことしは大雪で、どこもかしこもまいにち、雪すかしをしていました。
ぼくのうちでも、まいにち雪をすかしていました。ぼくは、はじめのうちはいやだったけれどもまいにち雪すかしをしていたら、よその人たちから、ほめられたので、うれしくなって雪すかしをしていました。
　ぼくらが一日すると、五十円あたるので、ぼくは、まい日して、お金をためています。弟も、雪すかしをしますが、あまりしませんが、ぼくと、おなじいほどあたります。でも、父がしごとが、いそがしいので、あまりはかどりませんでした。でもすこしずつやっていればすむと、おもって、毎日すこしずつしていました。

冬の一日　　小西　末男

　学校から帰ってきて、宿題を夜することにして、昼は遊んできて、テレビを見て、宿題をしようとしても、目が、ひらかないので、いっそうしていかないことにするかなと思ったり、やっぱりしていこうと思って、少しできたらねてしまったので、しょうべんにおきたらどうぐが、くしゃくしゃになっていたので、ふとんの下にいれて、しょうべんを、してねて、朝になったら勉強を早くしている、ゆめを見て、朝ねぼうをして、それから勉強して、やっと終わったと思った時は、もうじき学校が始まるので、いっしょうけんめい走っても、すべって走れなかったが、ちこくしなかったが、ひやあせをかいた。

時間かんねん

戸田　順次

ぼくが、五年生になって二か月ほどたった日、きゅうしょくが、終わって遊んでいる時、そうじが、はじまったサイレンもしらずに、遊んでいたら、みんながぞうきんやほうきをもって、そおじをしていた。ぼくは、まだはじまっていないので、ただ、ほうきやぞうきんをもっているのだろうと思って、また、運動場のはなっぱしへ走っていった。

ぼくは、遊びにむちゅうになっていて、そうじの終わったサイレンをそおじのはじめのサイレンだと思って、ゆうくり歩いて行った。そして講堂の横の入口へ入ろうとしたら、みんながぞうきんをもって川へぞうきんをあらいにきた。ぼくは、へんだなあと思ったとたんに、みんなといっしょにそおじの係りの先生、西田先生がやってきた。西田先生は、ぼくがそおじをしていないとピンときたらしい。

「戸田君、どこへ行っていた」と、どなった。ぼくは、およおよになった。「でも、どうしょうもなかったんです」といったら、先生は「そうかじゃ今後、気をつけるんだぞ」と言って頭を一っぱつなぐってむこうへいってしまった。それで、ぼくはえらいはじをかいてしまった。みんなの前でどなられたら、だれでもはじをかくのは、あたりまえだと思う。

ぼくはあの時のことは、いまでもわすれられない。ぼくのわるいところは、時間かんねんのないことだ。中学へ行ったら、時間かんねんをよくまもり、りっぱに進んでいこうと思う。

親類の家へいったとき

橋本　　豊

ぼくは、五年の正月の時、おじさんと、京都の親類のうちへ、あそびに、いきました。いく時の汽車が、ものすごくこんでいました。

親類のうちへついたのは、昼ごろでしたが、まだごはんは、食べていないようだった。おばさんがでてきて、おどろいたように、「よくきたなあ」といって「さあ、はいれはいれ」といいました。

家の中からおじさんと、あきら君が、でてきました。ぼくは、「こんにちわ」というのがはずかしかったが、勇気をだして「こんにちわ」と、いってから、げんかんで、もじもじしていたら、「豊、早く、はいれ」と、おじさんがいったので、はいった。

そして、ごはんをたべてから、おじさんとあきら君としげる君とぼくと、ふろにはいりにいった。ふろはいっぱいの、人がいた。

ぼくは、せっけんが、ほしかったので、いおうとしたが、言葉がちがうので、いったらはずかしいさけ、京都弁をつかおうとしていったが、なんやらわからん言葉になったので、ふろにはいってる人たちがわらった。ぼくは、ものすごくはずかしかった。

そしてかえりの汽車のなかでもそのことを思い出した。ぼくはそのことが、あってから、はずかしい心をなくそうと、実こうしている。

スキー 樫田　幸夫

ぼくは、太田もくざいの森君と小原のスキーじょうへいきました。そしてはころんでばかりでした。げんじとゆう人が、いちばんてっぺんからすべった。ぼくはおそろしくてのれませんでした。森君は、ころんでおりてきました。そしてスキー場には、人がたくさんいたのであぶなくて、すべれませんでした。

森君たちのスキーは、レースの、スキーでした。ぼくは「おれんか」ときいたら「おれん」といった。そして、ぼくは森君といっしょにすべったが、さきに、ぼくがころびました。そして森君は坂のところでもさっとあがっていきました。とてもおも白かった。

思い出　寺田　正博

ぼくは、朝早く起きて、すぐ佐野へ行った。新聞配達の時だった。ぼくはポケットに百三十円持っていた。そのお金を、おとしたのだ。お金は辻君の家の前まではあったが、小学校の前まできたとき、ポケットの中には、なかった。

ぼくはさむくて、ポケットに手をつっこんでいた。しんぶんをくばる時、ポケットから手を出す、その時、おちたんだろうとぼくはよそうした。

学校のかえりにぼくは思った。辻君のいえから小学校のまえあたりで、ゆきわけさぎょうをしていた。その人たちが、ひろってつかってくれればよいとおもった。

おかあさんは、おとしたものはしかたがないといった。

スキー　成田　幸一

朝学校でぼくは、吉岡君に、「あしたししくへいかんがか」と、きいたら吉岡君が「よし行こう」と、いったので、ぼくは、「よし、ぜったいいくげろ」とまたきいたら、吉岡君が「いく」と、いったのでぼくは、安心したらはじまりのベルがなった。

じぎょうがすんで、さようならをして、家へかえったらもう四時ごろだった。ぼくは、いそいでスキーに、鉄ろうをぬった。ぬりおわったら、もう五時半ごろなので、少しテレビをみてから、ごはんをたべた。たべてからまた二時間ぐらいテレビをみてから、明日、スキーにいく用意をしてからねた。

朝五時ごろおきて、吉岡君のところに電話をかけて、「すぐこい」といって、家でまっていたら、すぐきたさけすぐ出発した。

ロープウェーの駅についたさけ、切符をかおうとするとお金がなかったさけ吉岡君に「まっとって」といって、さがしにいったら、すぐみつかった。それからすぐ切符をかって上に登ったら、ふぶいていたから、ハウスにはいってやむのをまっていたら、すぐやんだので、スキーをハウスからだしてスキーをはいて、リフトのところまでスベリおりて、吉岡君と正弘といっしょにリフトにのったら、正弘がおとろしがって、やっとのった。また上から下まですべって、またリフトにのろうとしたら正弘が「リフトにのったらとうちゃんにいう」といって、正弘だけ、スキーをかついであがった。それからだいぶすべっていたので昼ごはんにした。

またふぶきになったので、家にかえろうと吉岡君にきいたら「かえるか」といって、スキーをいいがにしばった。ちょうどゴンドラがあがってきたので、それにのっていった。

スキー　　辻　　順正

先週の木曜日、六年全体でスキーにいった。スキー場についたらぼくはすぐスキーをはいて、たいらなとこで速さをくらべていたら、いつもくるときと同じぐらいの速さだった。すこしたって北川先生が「体そうするから」といったので、ぼくはかたまっているところへ入っていった。体そうがおわると、みんなあがった。あがるときスキーをはいてあがる人や、ぬいで上がる人でまちまちだった。ぼくはぬいであたった。あがったら、やち先生の組がきていた。ぼくは頂上までついた。そしてそこでまがる練習をすこしして、ぼくは下まですべったらあんまりおもしろくなかったので小屋まですべっておりて、またぬいであがった。ぬいであがると中、樫田君の頭にスキーがあたったので樫田君がないた。そこへ校長先生がきて「しらんとあたったんだろう、ゆるしてあげなさい」といった。ぼくは樫田君に「かんにん」といったら樫田君が首をふったので、ぼくはまた頂上へ行ったら頂上に戸田君や吉村君がいた。ぼくはそこで、またまがる練習を十分ぐらいして、まん中へんどまですべりおりようと思ったのですべったら速かったので、また小屋まですべっていった。またぬいであがろうと思ってぬいですこし上がったら北川先生が上へあがってきたので、はいて二番目の急な坂から小屋まで、すべっていった。

小屋についたら、たかしが上へあがってきた。ぼくは、たかしが水をのんできたようだったので、ぼくはたかし君に「どっから水をのんできてん」ときいたら、たかし君が「村上の家や」といったので、ぼくはと中までスキーをはいておりて、スキーを雪の上にさして、村上君の家にいって「水のまして」と、いったら「のんまっし」といったので、ながしでのんで「あんやと」といって、スキーのある場所にいって、スキーをかついで小屋にいったら、常山君と宮君が下へおりていったので、ぼくもついていった。常山君と宮君は村上君のとなりの家へはいっていって、常山君が「水のましてください」と、いったらなかから「前の水のんこっちゃ」といったので、ぼくは前のげんかんみたいなところの、右側のほうに水槽があったので、それをのんで小屋に上がっていったら北川先生が「あと十分ほどや」といったので、ぼくはすこしあがってすぐしたまでおりてきて、ぶらついていたらピーとふえがなったら、みんなおりてきて、せいれつしてやまをおりた。

ね　こ　 　　橋場　　茂

六年生の夏のことだった。学校から帰ってきたら、晴美と由美が玄関の方へ背中を向けて「わーい、わーい」と、さわいでいた。ぼくは、「なんだろう」と思った。今度は由美がテレビの後ろへ手を入れている。ぼくは、すぐ六じょうの部屋にカバンをおいてテレビの後ろを見たら、小さなねこがいた。

ねこがにげるといけないから晴美にねずみ取るかごをもってきてもらって、そのかごに小さなねこを入れた。そして物置きから板やくぎ、それにかなずちをもってきて小さな小屋を作った。でも入口が小さすぎたので、また作りなおした。やっとできたのでうらへ行って遊んで、帰ってきたら、晴美がねこの家をこわして、あったので、もう作らないことにした。

夜になって父と祖父がもどってきたので、昼のねこのことを話したら、父が「名前は？」と聞いた。ぼくは「しまった」と思った。

母が「名前をみんなできめましょう」と言った。このねこはがんこなので「ゴリラ、ヒョウ、ライオン」などの名前があった。でも最後の方にぼくが「ハヤブサ」と言ったが父が「それより強い“トラ”と言うのはどうだい。からだも口の先からしっぽの先までしまだろう。にあわないのはしっぽが短いぐらいのものだ。」と言いました。みんなも賛成しました。

そして名前は「トラ」になった。ほかの人に聞いたら、しまもようがからだぜんぶについているのは、こんじょうが悪いし、強いと言っていた。ぼくはそのとおりだと思う。ぼくより小さい人にはかみつくし、いぬを三びきあいてにして、けんかしたこともある。

はじめは、むずかしい　 　　山田　孝則

ぼくは、一年の時から、一回でもよいから、講堂の教段の上で、なにかを発表したいと、思っていた。

六年の三学期に、一度チャンスが、来た。それは児童会の書記に、すいせんされて教段上で、演説をしなくては、ならなかった。

ぼくは、今がチャンスだと思った。でも、いすにこしかけてまっている時、体がふるえるようだった。橋本君が終わって、ぼくの番になった。教段に登っても、うまくしゃべれなかった。そのため落選したが、ぼくは、うれしかった。

ぼくは、あんな所に上がって発表したくなかったが、児童会の文化部の部長になってしかたなく発表しなくては、ならなくなった。発表は月曜会の日だった。

月曜会の日に、ぼくは、わすれていて、文化部の先生の所へ紙をもらいにいくのを、わすれていた。そして、月曜会が始まってから、紙をもらいにいったが、なかなか見つからなかったが、ひきだしの、すみにあった。すぐ、講堂に、もどり教段の上にあがって発表したが、その時もつまってうまくいえなかった。でも、これからならばもうすこしうまく、発表できる自信が、ついた。

なんでも、はじめが、むずかしいことが、よくわかった。

大　雪

吉岡　文雄

今年はれい年にくらべて大雪だった。去年より今年は雪のふるのがおそかった。そのかわり、大雪になった。そのため町は雪だらけになった。じえい隊もでて町の除雪にあたった。本町の道は本町二丁目ぐらいわれたがまだ新町はのこっている。そのために僕のとこの自動車が出て雪をすてるのをてつだった。

ダンプカーやブルトーザーも出て町の除雪に力をいれた。町の中は雪がもうないくらいになった。

ぼくは、そのたびに、もう大雪にならないといいなあと思う。

手を折ってから

村田　俊治

ぼくが四年の時、小山君とすもうをしていた時、小山君にうわてなげで手をついたら、骨がかけ、福岡先生のスクーターで医者までいきましたが満員でしたので、またスクーターに乗って今度は一の宮の学校にいきました。

そこには福岡先生がしっている、しろうとの先生がいました。ぼくはこわそうな先生だなあと思っていたらやはりこわい先生でした。

なぜこわかったかというと、いたい手をむりやりに、のばしたりまげたいさせられたのですから、ぼくが「いたい、いたい、」というのに先生は「いたくない、いたくない。」というのですからね。どうにかこうにかのばせるようにできるがに、なりましたが、それがぎゃくこうかでした。

あまりいたいので、かあちゃんといっしょに骨つぎ屋にいったら、「そんなひどことをしたのか」といったので「した」といいました。

それからぼくは医者にかよいだしたのです。

作文はきらいだ

常山　輝夫

ぼくは一年に入学してから六年の今まで、作文をすきだと思った事は一度もありません。作文の宿題が出ると、どうゆう事を書いたらよいかとまよわされてしまって、ものすごい時間がかかります。

いつだったか先生が「卒業記念文集にのせる、作文、詩、ひとり一言を一点ずつ二十日までに書いてきなさい。」と言われた時、いやなもん書かんなんげなあと思った。

作文だけはなかなか書けなかった。いくらでも思う事があるのだけれど、ひとりひと言のような短い文にしかなりません。遠足などに行って来たあとの日だったら，いやでも書けますが、こうとつぜん言われては、こちらも苦労します。

中学に行ってから、作文を書くと言うような事がないように願っています。

冬の時

畑　　雅克

ぼくは、冬の時に雪を、どかしてから、スキーに行くと言ったら、とうちゃんに、おこられました。次の日「スキーに行く」と言ったら、「だめだ」と言われたのでいきませんでした。それでなにをしたらいいかと聞いたら「雪どかしのてつだいをせい」と言われたので、しかたなくしました。そしてすんでからすぐスキーに行って来ました。

元旦の一日　　館　秀明

元旦は一年のはじめであると思って、一番さきに起きた。ぞうにや、ごちそうを食べ終わったら、九時四十分だったので、よういしたら九時四十五分だったので、ちこくかと、思ったのでいそいでいった。

しゅくが式が始まった。校長先生や町長さんやほかの人がはなしをした。

町長さんは、今年の間に、新しい小学校を建てるといったが、ぼくたちは、新しい学校には、はいれないから、残念だった。家に帰って母にはなしたら、お金がいらないからたすかったといったが、ぼくははんたいだった。

テレビは、だい人の新年の、あいさつだった。昼からは、まんざいだった。

それから、のじやにいって、ピストルのおもちゃを買いに行ったが、いいのがなかったので、帰ったら、もう夜だった。ごはんを食べてから、トランプをして遊んだ。

大　雪　　大崎　和夫

ことしは、大雪だったのでものすごくつもった。ぼくの家はよこに約一・五メートルぐらいの川があったので、すぐじょせつできた。といっても二十日ほどかかった。

シューシュードスン、これはビニールの上に、雪をのせるので出る音です。このビニールのおかげでものすごく仕事がはかどった。仕事が一だんらくした時に、ぼくは町に出てみた。ものすごい雪、あっちを見てもこっちを見ても雪ばっかし「まだこんなたんとあるがか。」と思った。

上がったり下がったり、なにしろ、手がもうすぐ屋根にとどくくらいーかいははるか下にあった。帰ろうとしたら、でっかいあながあいていたので中を見たら自動車がうまっていた。

十日ぐらいあとに、ます田君がスキーにさそってくれた。スキーに行って帰って来てそれから町に行った。あいかわらずたくさん雪があった。右に行ったら大きい機械がブルブルルルルと言って雪を持ってダンプにつみに行く。ダンプは二回で雪がいっぱいになる。ぼくたちは、おちそうなのを大人の人といっしょにおとした。また、ブルブルといってひょいとつかんだが、ガクンとなっておとしてしまった。こなみじんになった。

とうに赤い雪がふった。ばあちゃんにきいたら「赤い雪がふったら、いままでふった倍の雪がふる。」といったので、ぼくはこれ以上ふってもらったらこまるなあと思った。

外に出てかまくらをほった。史上最大のかまくらかしらんが、たてって手を上げてもてがとどかないくらい高くなった。ばあちゃんが「もうはいんまっし。」といったので、うちにはいった。

病　気　　吉村　照夫

　ぼくは五年の夏休みにもうちょうになった。毎日毎日、ふとんの上でねてばかり、となりのおねえさんが本をかってきてくれた。
　母に「いつ、退院できる」ときいたら夏休みのおわりごろといった。ぼくは心の中でまだまだ、退院できないと思った。そう思うあとからくやしなみだがでてきた。それは、夏休みになにもしないでねてばかりと思ってなみだが出る。退院したあと病気になったらいやだなあと心の中で思った。
　ぼくはそのあとで、病気なんかぶっとばすと心の中で決心した。

お正月　　鈴木　　衛

　おおみそかの日は、とても楽しかった。一月一日は去年より、ちっともおもしろくなかった。親類の人が、あまりこなかった。ぼくは、早く中学へ行きたい気持ちになる。今年の一年は、とてもおもしろいことになると思う。おおみそかの前に金沢へ行ったりしてもちつき、スキーに行くことがなにより楽しみだった。正月には、おぞうにをたくさんたべたが、おぞうにのほかはひとつもたべなかった。おおみそかのよる、十二時まで起きてねぶたいのをむりに白山さんにいった。あまりたくさんの人がいるので十円玉がよくおちているときもある。
　まだ雪があまりふらないのが残念だった。スキーもこうてあたるしうれしいことばかりある。又この学校もたてる。ぼくたちが卒業してからたてるので、ぼくたちはそれが残念だ。中学校にはいったら、また新しい学校をたてるといいなあと思っている。

人の前に出たら　　舛田　　明

　ぼくは、人の前に出るとあまりよくしゃべれない。みんなの目が、ぼくに集中すると、ことばがでないのだ。でも、げきをしている時はちがう。ひとりでにことばがでるし、はずかしいという気がしないのだ。だから人の前にでたら、げきをやっている時のつもりで、思っていることをどしどしいってみたい。

実　験　　三国　仁司

　ぼくは、去年の夏休みに葉脈のひょう本を出した。このようなよいものを出品したのは、はじめてだった。ぼくがこのようなものをだせたのは、こんなわけがある。
　五年の時ぼくは、だっちょの手術で学校をやすんだ。休んでいる間に、中和する実験をしてしまったことを谷内先生にきいた。楽しみにしていたので、この時は、もうちょっとで、なみだがでそうになった。だが、すぐあと谷内先生から「チョウをしらべてみないか？」と、いわれた。退院してから夏休みになるのがまちどおしかった。だがあまり完全なものでなかった。
　今年の六月、谷内先生にけんび鏡をかしてくださいとたのんだ。そしてび生物をしらべた。だが、これも完成しなかった。
　今度は、夏休みにしぼった。器具をかりてからは、ビカーをわったり、手があれたりしたが、九枚の葉脈のひょう本をつくりあげ、出品した。これからもこれ以上の品をつくっていこうと思っている。

中学生になったら

常岡　　進

　ぼくは、中学になったら友だちといっしょに、電気クラブにはいりたいと思う。ぼくは、機械をいじるのが、大すきです。このあいだも、こう石ラジオを、組たてて、やっとなったかと思うと、弟がふんでしまいました。近所の、中学三年の人も、こんなことをするのが、とくいです。だから、わからない所を、教えてもらっています。

　近所の家へ遊びに、いったら中学三年の人が、アマチュア無線のことを教えてくれました。六時ごろに、なったので帰ろうとしたら、アマチュア無線の研究と言う本をかしてくれました。この本は中学の本らしいので、字を読まないで、ラジオや無線の図を見ていました。

　ぼくは、はやく中学生にならないかと思う。また、電気クラブのほか、スキークラブへも、はいりたい。

　このあいだの新聞にも、鶴来中学の優勝がでていたので、ぼくも、あのように、すべれるようになると、どんなに、うれしいだろうと思う。

お正月

麻木　啓二

　元日の朝、おぞうにたべた。その日は、だれもこなかった。二日めは、もちをたべなかった。なぜかというと、もちはたくさんたべたからあきたのだ。だからごはんをたべた。おかずはたくさんあった。種類は、かんだら、きんぴらごぼう、こんにゃく、するめなどがあった。

　お客は、だれひとりこなかった。三日めも、ごはんだった。おかずは、かんだら、するめ、すしだいこんが、あった。一、二、三日は、テレビを、九時までみていた。

　四日めは、四人来た。小杉のおばちゃんと、ぼくのいとこがきた。弟は四年、兄は中二だろう。いとこは一時間ぐらいで帰った。小杉の人は、五時の電車で帰った。いとこ、しんるいは、ふかいものだと思った。

　五日め、お年玉もたくさんあつまった。自動車の雪どけをした。その日は家族で、すしをたべにいった。

　六日目はよく遊んだ。七日めは作文をかいた。

友だち

松本　武夫

　去年の秋に、ぼくの、友だちのこまき君が、金沢にかわって、いきました。ぼくは、こまき君と、けんかをしたり、遊んだりして、仲よくしていましたが、急に、かわっていくことになったので、ぼくは、びっくりして、こまき君に聞いたら、「この家に、月橋のやぶたという人が、すむがや」と、教えてくれた。

　それから、こまき君が、かわっていって、やぶたの人が、こまき君の家にすむように、なりました。それから時々、こまき君が来て、ぼくの家で、遊んで帰ります。ぼくはこまき君が、冬スキーにいっしょにいけないから、残念だと思っています。

　ぼくは、こまき君のことを、覚えています。

スキー

杉田　夏代

一月三日田んぼの中で、ごぼりながらおにごっこをしていたら、姉ちゃんがスキーに乗って来たので、妹の正代と出口の千ちゃんと私と三人して追いかけて行った。中学校の運動場の坂でかわりばんこに後ろにのせてもらった。

次からおちゃっこして乗って私が前に乗って正代と千ちゃんは後ろに乗ってすべったら私がかじをとったのでうまくすべれたけど、次に正代が前に乗って後ろに千ちゃんと私が乗ったら、ころんで正代がどいてよこに行ったので、姉ちゃんが前にころんでその上に千ちゃんが乗ったので、姉ちゃんが左足をねんざした。

その日は出口の父ちゃんが四十二の祝いの日だったので父ちゃんはよばれにいった。母ちゃんは、きゅうじにいったので父ちゃんも母ちゃんもだれも、いなかったので医者にいかれなかった。

次の日もいたがっていたので母ちゃんが細川へ連れていった。

お砂糖

梶　喜美子

去年の末、学校から帰ると母が寝ていて、父が、まくらもとで、看病していた。私が、靴とかさを置いていると、父が、百二十円持って来て、私に「砂糖と牛乳を買って来てくれ。」と言った。

私は、「ぼんや」へ行って「こんにちわ、牛乳とお砂糖ください。」と言って、牛乳を持って「ぼんや」のおばさんの所へいった。すると、おばさんが、「梶さん、砂糖は、ふくろいりのはないのやけど。」と言った。それで私は砂糖がいくらか知らないので、食塩なら二十円であるので「それなら二十円がください。」と注文した。

私は、何で、お金を百二十円も父が渡してくれたんやろ、三十六円しかいらないのに、でも、きっとまちがえたんやろうと思い、砂糖のくれるのをまっていた。そして、お塩ぐらいくれるだろうと、思っていたら、「ハイ。」といって、私に砂糖を渡してくれた。すると砂糖が、ほんのちょっぴりしかなかった。

何て、あのおばさん、ケチやろ、塩やったらあんなに、たくさんあるがに、こんな少ししかくれんこと、ケチケチ・・・・・。と思って、家に帰り、その事を話すと、父と母が笑って、「喜美子、砂糖と塩とでは、砂糖が全ぜん高いのだよ。」と教えてくれた。私は父に、「砂糖を百円が買ってくるがやと教えてくれたら、良かったのに。」とブツブツ言っていると、父が「そんな事知っているだろうと、思って言わんだのや。」と言った。母は「どうせ、コーヒーにいれるんやからそれでもいい。」と言ってくれたので、ほっとした。その時ほど、きまりの悪かった事は、なかった。

それで私は、日ごろ、お手伝いしなくてはこんな時に、失敗するので、私は、卒業するまでにこんな事になるのをさけて、お手伝いをしなくては、ならないと思っている。

おかあさん

北村裕見子

わたしの、お母さんは、やさしいときもあるし、おこったらプンプンになります。お母さんの、かたをもんでいたら、しらががふえていました。とっていると、あまりおもしろいので、何本もとったら、十二本ほどあった。また、はえてくるのかと思った。はえてきたら、何本もとってやろうかなあと心の中で思った。

お母さんは、朝早くから、起きて、仕事をしている。見ていると、冷たい水で茶わんをあらっている。たいてい、わたしが、水でくつ下をあらっている時は、冷たいかんじが、しないのに、あとから、手が冷たくて、しもやけが、できそうだ。すぐに、しもやけができるのが、いやなのでクリームをつけています。

はごたい

藤本　詠子

私は、時々母にはごたいをすることが、あります。どんなはごたいかというと、けんかして、くやしくなった時に、こたつに火が入っているのに「はいっとらん」といいます。それをなんべんもくりかえします。それから、うちのおかあさんは、「はごたいというのは、はんたいのことや」と言って、また私は「はんたいのことははんたいやがね。」またはごたいします。

わたしの兄のやっちゃんは、おかあさんのみかたをすることがあるので、二たいーで、わたしはなくことが、時々あります。

私は、六年生になってもはごたいするのは、わるいことだと思います。もうすこしで中学生になるから、はごたいする欠点をどうかして、卒業するまでのすこしの日で、はごたいをする欠点をなおさなければならないと思います。

スタンド

松田　照代

私の家には、スタンドが一つしかないので勉強するとき、兄ちゃんとかわりばんこにつかうのでこまる。でも兄ちゃんは、夜つかうので、昼はわたしだからいいのですが、中学になると、夜もいるから、兄ちゃんに、相だんして、スタンドをつくることにした。スタンドの、どだいも、でんきもつけたが、かさがうまくできなかった。

三週間ほどたって、又、相談して、つくっていたら、おとうさんが「そんなもんつくれんから買うまっし」といったが、どだいがりっぱになったので、もったいないから、又かさをつくりはじめた。しあがったのでかぶせてみたら、あまりかさが長かったので、あすまたミシンできれをぬうていいがにすると思ってそのままねた。

雪はこび

今西　啓子

今日私は学校から帰ってきてから、お母さんと雪はこびをしてやりました。そしてから私はお母さんのてつだいをしてやりました。そしてから私は雪をはこんで行きました。そしてから私は雪はこびがすんでから、やでんのよしのりをみにいったらねてました。

そしてから私は帰ってから又雪をはこんでいました。そしてから終わってからうちへかえってからおかねをもって、おかしをかいにいきました。そしてかえってからわたしは、こたつへ入って、おかしをたべてから、テレビをみて、よしのりがおきとらんか見にいったら、よしのりはおきていました。

そしてから私はよしのりをつれて、うちへいきました。そしてから私はうちへかえってからテレビをみていたら、そしてから私はよしのりをつれてうらをいきました。

そしてから私はよしのりを見てやりました。

もうすぐ卒業だ

吉本　慶子

私たちは、もうすぐこのなつかしい小学校ともおわかれだ。長い六年間の尚も短い六年間のように思う。

私たち、このお別れは六年みんなにとって、とても悲しいことだろうと思う。私は小学校一・二年向先生に受けもってもらった。毎年年賀状を出し手紙を出したりしていたのに、とうとうガンでなくなられた。

三年の山本工先生は、とてもふとっていて「かば」というあだながついていた。

四年の中本先生五年の谷内先生、六年の津田先生や平岸先生みんなはとてもいい先生ばかりだった。

私は、もうこれで小学校とお別れだと思うと、とても悲しい気がする。

お使い

南谷眞理子

私は、富田さんといっしょに、根来へパンをとりにいくとき、今町にブルトーザーがいて、やっとそこをとおりぬけた。また歩いて行ったら、信用金庫の前は、通行止めでまわり道をしなければならなかった。それなら、ゆうびんきょくの所をまがらないで、「まっすぐにいけばよかった。」と富田さんと二人で言い合っていた。富田さんはとちゅうで、用事があったから、わかれた。それからまた行ったら、こんどは、道いっぱいにブルトーザーがいた。それで、私はおとなのひとのあとをついていったらやっといけた。

帰り富田さんが来た。富田さんが「ここからいったらいいがや」といったから私は富田さんのあとについていった。

今町に入った時、またブルトーザーがいた。それで雪の高くつんであるところをあるいていった。とちゅうで、かついでいたパンのはこが下へおちにかかった。こんどは、急なだんが、はこをもっているのでおりれなくなった。しばらくたっていたが、私はかついでいたはこをおろして、富田さんに、さきに下へおりてもらって、箱を受け取ってもらった。そして私がおりた。やっと家についた。

スキー　　作田　純子

日曜日の午前、私と光明とでスキーに行きました。でも二人で、いったのは悪いと思っています。スキー場は大人の人で一ぱいでした。私ら二人はすみっこの方ですべっていた。まん中があいたので、私はまん中ですべっていました。でもすべっているのに、むちゅうでしたから、光明のことはわすれていました。

とちゅうで私はふと光明のことを思い出しました。私は光明の所をみてもいないので、さがしだした。でもどんなにさがしてもいなかった。するとねいちゃんが、友だちといっしょにきていました。私はねいちゃんに相談しょうと思ったが、もしどこにもいなかったら私のせきにんになると思って相談するのがいやになった。

その時ふと思った。ひとりで家に帰ったのかもしれないと思ったので、私は家へ帰ってみようと思った。帰り道で私は心配になった。どうしょうと思った。家についたら、うちの前にスキーがおいてあったので安心した。

このことを祖母に話したら祖母はわらった。

昼ご飯を食べてから、又私と春美とマリちゃんと、スキーにいった。スキー場は午前中より午後の方が多かった。マリちゃんと春美は、上から三番目の所で、私は、二番目の所からすべった。マリちゃんがすべると春美もすべった。私もすべった。マリちゃんがころんだら、晴美もころびそうになった。私はころばなかった。

大分すべったら、マリちゃんが「帰らんか。」といったので、私は「帰る」といって、三人で帰った。

なんきん豆　　富田　　了

二月十八日の日に、私は、なんきん豆を、たべました。

なんきん豆を、たべると、やめられないので、たくさんたべていたら、お母さんに、「あんまりたべたら、のぼせる。」と、いわれたから「もうこんでやめる」と、いったけれど、もうすこし、たべました。

でも、わたしは、のぼせませんでした。

スキー　　山形加代子

私たちは、知守町の六番組です。私の家のすぐ横に、広い野原があります。そこは、一番下の坂、次に下の坂よりもすこしきゅう坂に、なっています。私は一番下の坂しか、のれませんでした。由美子のちいさいのでのると、二番目の坂のところはのれました。

私はおもいきって、大きいスキーで、二番目の坂のところを、のってみました。下の方へいくと、なんだか、おそろしくなりました。二番目の坂の所まで、くると、おそろしくなり、スキーの上にすわりました。そしたら、頭が雪の所に、つきました。

それから今度は、回転のけいこをしました。すこしだけまがれるようになりました。それから、又二番目の坂の所から、すべると、お昼になりました。私は家にかえりました。

でも私の家は、朝ごはんを、おそくたべたので、ひるは、たべませんでした。私はすこしこたつに、あたってから、のりにいきました。すこしのっていると、叔江が、きました。私はスキーを叔江にかして、やりました。そして、すこしだけみんなのすべるのを、見ていました。それから叔江にスキーの後ろにのせてもらいました。私たちがスキーにのっていると、ゆきが、ぶりだして、きましたので清美ちゃんと遊んでいましたら、はれてきたので、スキーをのりにいきました。

私たちがいったら、加藤の子らと山下の子らが、スキーにのっていました。私たちがのろうとすると、すぐにじゃまをしました。それからすこしたってから、私の家の所に、ちいさい、ほいくしょうへいっている子らが今度は、スキーにのりにきました。そしたら山下の子らが今度は、ちいさい子らに、じゃまをしていました。そして雪が、ふるまでのっていたら、山下の子らは、かえりたいけどかえらないで、じゃまをしていました。

私たちが雪がふったので、家にかえったら、あの子らもかえっていきました。

私は、又清美ちゃんと、遊んでいました。

顔面神経マヒ

清水真希子

一月五日のことです。その日は、友だちの家へ、新年会に行く約そくのひだったので、早めに昼ごはんを、たべていた。その時、なにか面白いことがあってわらった。そしたら母が、「真希ちゃん？あんた口へんなあわ。まがっとるわ。」と、ふしぎそうに言った。続いて、妹の奈ちゃんも「ほんとや。へんなあわ。」と言った。「あんた顔面神経でないけ。」と、びっくりしたような、心配そうな顔をして、又、母がいった。そして、すぐ、私のひたいに手をあてて、「ちょっと、熱あるわ。」「真希子、はよねまっしお医者さんよんできたるさかい。」と、あわててフトンを、ひいてくれた。

フトンの中にはいって十分か、二十分で、織田先生がいらっしゃった。ひたいにしわをよせたり、口をふくらかしたり、いろいろしたが、先生は、「左顔面しんけいだ。」とおっしゃった。

左顔面神経マヒという病気は、顔の左半分がおもうようにならないのです。そして、これがなおるのには、一か月は完全にかかるそうだ。

でも、この病気はちょっとおもしろい病気である。ふつうの病気なら、どこかいたいとか、からだがだるいとか、こえいのになるのだが、今のわたしのは、ちがう。ただなんかすると鼻、口が右のほうによってしまうのだから、あんがいらくな病気である。でも、神経をつかうようなことは、あまりしてはいけない。そして、ほおを風にあててはいけない。この病気になった原因は、あまり冷たい風にあたりすぎたので、左ほおの神経がにぶったのである。だから、よけいほおを風にあててはいけない。そして、なるべく休まなければいけない。

こういうことが、一か月もつづくのだから、らくなような、つらいような、へんな病気である。この病気になって一番残念なのは、今年は、スキーができないということです。でも、もしかして早く病気がなおったらできるかもしれないという希望もすてないで、まってます。

家　族

佐藤美枝子

時計は八時。母は新聞を読んでいる。姉は読書している。私は作文をかいている。九時、いっこうに作文はすすまない。私は面白くなかったので、計算紙に絵をかいたりして考えた。

「ねえ、トシコちゃん。・・・おしえて。」「うん」「フー」・・・私はいま姉ちゃんいま姉ちゃんたちのすることをかいた。母は針箱をまくらにし、こたつでいねむりをした。「フゥー」「はぁ」と姉を見た。姉はねむたそうに本を読んでいた。

私は時計を見た。九時十五分。私は又、だまって作文をかきおえた。

お母さんといっしょ　　吉川　幸子

私と妹は、お母さんといっしょにくらせないかなあと、いつでも、思っていた。私は、おばあちゃんにたのんで、お母さんと、いっしょにくらしたいといったら、おばあちゃんが、「すぐ来るよ。」といったので、わたしは、学校がすんでからすぐかえってきたら、お母さんが、東京から、私と妹の服を、かってきてくださいました。私はお母さんに「ありがとう。」といった。それから毎日、お母さんは、「しっかりがんばっていこう。」といった。わたしも「うん」といった。

妹は、わざわざと、お母さんに「お姉さんあまえとるのや。」と聞いていた。お母さんは「お姉さんって、あまえんぼうねえ。」といっていた。でも、勉強の時は、じゃらけていたら、お母さんは「だめです」と注意をしてくれる。でも妹は、お母さんが、注意しても、じゃらけてばっかしだから、わたしが、おこると、お母さんが、「かまわんと早く勉強してしまいなさい。早くした人は、おいしいものをあげる。」といってくれる。妹は「ほんとうにくれるの。」と、早く勉強してしまう。わたしは、だまかしているのかと思ったら、「だまかしなんかせんわ。」といって、おかしをくれた。おばあちゃんは、「いいなぁ。」といった。わたしは、「ほな、おばあちゃんにあげる。」といってやってしまう。

それから、いく日かたって、わたしは、お母さんに、「もう東京いくのか。」ときくと、お母さんが「もう、幸子と、さとみと、おばあちゃんをおいていけますか。」といってくれる。「お母さん、ほんとうにいかないの。」とわたしはいう。「ほんとうや。」といってくれる。

時々お母さんは、「こんな大きい子うんだのか。」といっていた。わたしは、うんだのは、お母さんやと、いっている。

それから、お母さんは、大学病院へ、仕事にいっている。帰るまで、家の仕事は、わたしが、するのです。だから、お母さんは、わたしに、「ありがとう。」といってくれる。わたしは、「毎日、するから、しんぱいせんと仕事をしておいで。」といっています。おかあさんは、「ほんなら、しんぱいせんと、仕事でる。」と、いっている。その時の、おかあさんお顔は、とても、うれしそうな顔をしています。

だから、まい日、みんなで力をあわせて、いるのです。でもわたしは、もう、春がくれば、中学一年生になるのだから、いまのうちに、しっかりてつだいを、しているのです。

新しい友だち 山岸　好恵

夏のむし暑い日の事だった。お母さんと、わたしと弟は、他吉おじさんの、おそう式に出かけた。犀川を境にして、北を上辰巳、南を水淵といって、けしきの美しい田舎である。

三人が、金沢からバスにゆられて、やってきたところは、この上辰巳の駅だった。長い橋をわたり、目的地へついた。

家の中の一番すみに長い髪をポニーテールにまとめた、一人の女の子が本を読んでいた。わたしは、すごく都会風な感じがする、そのポニーテールの女の子と友だちに、なりたいと思った。

よそのおばさんが、「子どもたちは、外へでていたほうがいい。」と、言ったので、わたしたちは庭へ出た。外のにわでは、黒ずんだ古い杉の木のむこうから、なごやかな夕日がいっぱいに、庭の西側にさしていた。

ポニーテールの女の子は、じっと、オニユリのしげみを見つめていた。わたしは。こうろうの火がめずらしかったので、人さし指でさわってしまった。「あつい。」思わずさけんだ。ポニーテールの女の子が、「だいじょうぶ。」といってかけてきた。それをきっかけに、わたしたちは、いろいろなことを話しあった。ポニーテールの女の子は、「中谷けい子」と、いってわたしと同じ、六年生だった。

大きなヤナギの老木や、たけの高いモミの木の下をくぐりながら、わたしたちは坂を登っていった。道ばたの花だんには、深紅のすばらしいダリア、マツバボタンの草の上には、かわいい、赤や黄色の花が、かたまってさいていた。わたしたちは、クローバーの花床のうえにすわって、四葉のクローバーをさがした。けい子ちゃんは十三もとった。わたしは七つしかとれなかった。けい子ちゃんはわたしに三つわけてくれた。それで二人とも十づつになった。

やがて長い間、照りつづけていた夏の太陽が、西にしずんで、こん色の布が、かぶさったように暗くなってしまった。

けい子ちゃんは、消えるように、お父さんと帰っていった。

いつになったらまた、けい子ちゃんと遊べるのだろう。

きそく

山内陸奥子

わたしと、姉ちゃんと、あんちゃんと三人できそくを決めた。そのきそくは、けんかの時に、だらとか、男みたいなことばをつかっては、いけないからきめたきそくだ。だらを一日五回まで、いったら茶わんあらい、わるいことばをつかった時には、うちのにわそうじだった。

けんかをしたときには、どうしてもわたしは男のことばがでるので、庭そうじをしたことがある。あんちゃんは男だから男のことばでもよいから、庭そうじをしなくてもよいのでとくだ。それにひきかえわたしは女だから損だ。

二月十九日の事　　谷口　康子

学校からの帰り道、私達はらっせる車の所を通ろうと思ったら、行けなかったので、遠回りして辻さんの横から行きました。

家にかえってから、すみちゃんとスキーに乗ろうと思ってよびにいったら乗ると言ったので、私もスキーの用意をしに家に行った。それから、すみちゃんの家の前の所で乗っていたけれど、おもしろくないので、木呂場さんを電話でよびだした。そして「すみちゃんの所へ遊びにこないか。」と言ったら、「らっせる車が家の前にいていけんがや。」と言ったので、「そうか」と言って又二人で乗っていました。

しばらくして、宿題のことをいいやっこしてたら心配になったので、「家に帰るわ。」と言って、家で明日まで宿題の作文と詩を書きました。それから算数の宿題をしていたけれど、わからなくなったので「やめた」と言って、かたづけてしまいました。

だけど、これではいけないと思い、これからこのようなことがないよう心がけたいと、私は思いました。

ランドセル　　浦　　洋子

一年に入学したとき、ランドセルをお祝いにもらった。うれしくて飛び回っていた。そして、入れたり出したりかずいだりおろしたりしていたと、おかあさんが教えてくれた。一年に入学したときは、新しいピカピカだったが、今ではぼろぼろになってしまった。

寒い日も暑い日も何もいわずに私のせなかにかつがれていた。夏休みと日曜日と冬休みの以外は、いつも私のせなかにかつがれて、学校に通っていた。

あと一ヵ月ほどで、そのランドセルをかつぐのもすんでしまうのだ。また、ランドセルといっしょに楽しかった小学校ともお別れだ。

けんか　　山崎　澄江

たしか三年生のときだった。だれだったか、まどガラスをふいていた時、しらんと反対側へおりてしまった。そのことでけんかになった。

小坂さんらと私らだった。小坂さんらはたくさんの人がいたが、私らは二人だった。でも一人の子は弱くてひとつもけんかをしなかった。かみの毛をむしったり、たたいたりしてとてもがんこなけんかだった。

上の学年の子が「すごいけんかや」と言って見ていました。講堂のあのへんで、けんかをしていたら一人の男の子が、私を助けてくれました。

私は今あの時のことをおもうと、私は一人やさけ小坂さんらのところの子は、おたがいにたたいたり、かみの毛むしったりしたんやろうなと思うとおかしいやら、はずかしくなります。

三年の時は、今のように口げんかなどをせんと、たたきやっこやらしていました。

私はどうせけんかするがなら、たたきやっこして、あとはあっさりしていることのほうでいいと思っています。

あかちゃん

木呂場洋子

私は、この間、加賀のねえちゃんの所へ、遊びに行きました。私はあかちゃんがすきなので、鈴をあげようと思って、もっていきました。あかちゃんの名前は、あきひろと、言う、名前です。あきちゃんは、よろこんで、いました。

ねえちゃんが、私に、おかしをあげると言って、だしてくれたので、私は、もらって食べていたら、あきちゃんがほうて来て、おかしを、とりに、かかっていました。私が、またもらって食べにかかっていたら、こっちの方を、見ていました。あきちゃんが食べ終わると、そこにおいてあった、すずをもって、一人で遊んでいました。

私は、あきちゃんの、もっているすずをとって、あっちの方において、取りに、こさそうともっていったら、ほうてきて、すずを取ってまた、一人で遊んでいました。

ク　ロ

坂　美栄子

太田木材の火事がすんだあくる夕方、父が犬をもってきました。そして犬の名前をつけようと私が父に言ったら、父が「この犬、黒い毛やさけ、クロにしとこ」と言ったら、みんなも賛成した。

学校からかえって、私がクロとよんだら、クロがしっぽをふりふり出てきたので、私はクロの、あたまをなでてやった。しばらくするとクロがないたので、私は外へだしてやると、げんかんのよこで、おしっこをした。しばらくすると又ないたので、こんどはなんだろうと思って、戸をあけたらクロは食べもののいれもののまえへきてすわったので、私はおなかがへっておるなと思って、食べものをやると、みんなたべてしまった。

それから一週間ほどたつと父が「べついんの前のはぎはらの家へクロをやることにした。」と、私らにいったので私は「なんでや」といったら、「ここらへんの人にめいわくや」といった。だけど私はさいごまではんたいしたけどだめでした。

そして、クロはとうとう、もらわれていくので、私はクロとあしたでおわかれだから、私はクロのすきなようにさせてあげました。そして、クロはもう私の弟ではなくなったと思うと私はさみしくなりました。

スキー

東田美智子

私たちは、学校からや家からお友だちとスキーにいきます。私はあまりスキーは、じょうずじゃありません。スキーをはくと、すぐころび、おしりをうちます。そして、ズボンをベタベタにして来て母にしかられます。なにもおもしろくない時は、学校のお友だちと、スキー場へ行ってあそびます。そして、ごぼっては雪をはらってまたいきます。また、はらっては、くつをベタベタにします。そして、かわいたら、あそびにいきます。

私はスキーにはちっとものれません。中学校にいくと私は、スキーなんか、けいこしないで、勉強をしっかりやりたいとおもっています。

詩

山　　米田　雅春

ぼくらは、山をいつも見ている　きょうも、ぼくを、みているようである
ずっしりと、おもみのある山
風にも負けず、雨にも負けず、いつも、いつも、たっている山

冬の夜　　谷口　信一

夜はしんしんとしていた　ぼくは勉強している
弟が聞く「でんきをけしてもよいか」と
ぼくは「勉強がすんでからならよい」という

母　　小西　末男

うちの母は、日本の歌なら、よろこんで聞くが
外国の歌になると、つまらん歌だと言って、テレビをけしてよこになる
が、となりのレコードが聞こえてきたら、うっとりとねむってしまう

わかれ　　戸田　順次

もうこの学校ともおわかれだ
悲しい、さびしい、だが、そういう気持ちを、おい出し
晴ばれした気持ちで、新しい世界へ出発しよう

一人ぼっち　　橋本　　豊

ぼくは家の中で一人いる　なんだかさみしいような気がする
何をいっても、ただ自分の声だけが、いつもとちがって聞こえるようだ
一人でいるのはつらい

雪　　樫田　幸夫

雪で、山も、町も白くうずまった　ししく高原の山も雪でうずまっている
雪でしろくなっている所を、ぼくと、太田へいっている森君と歩いていったら
ごぼっていいがに、歩けなかった

夜　　寺田　正博

カチ、カチ、カチ、時計の音が聞こえている
電車の音がちかづいて、遠くかすかにきえていく
きいろい電燈の光　ぼくはこたつで、勉強している

大　雪　　成田　幸一

今年はいつもより雪のふるのがおそかった
ぼくは、去年よりも雪の量がすくないと思ったが、
二月ごろになったらものすごくたまった。
今年の雪は地上最大のおおゆきだと　テレビやラジオがいっていた

スキー　　辻　　順正

ちょうじょうからすべっていたら、下の方にでんぼこがあったのでころんだ
おきてまたすべった　おそかったので、回転をしてみたらまたころんだ
まわり見たら下の方だったので、おきて、小屋の方にすべっていった

海　　橋場　　茂

海へ行きたいな　海へは何度も行った
でも、まだ友だちと、行ったことはない
早く雪よ消えてくれ　早く夏よこい　海へ行きたいな

将来の自分　　山田　孝則

ぼくたち、みんなが、将来、よい人に、なれるかなあ・・・・・
よい社会人に、なれるかなあ・・・・・
早くおとなに、なりたい

春　　吉岡　文雄

春がまちどおしい　そして、中学に入学する
小学校ともお別れだ
ぼくは小学校でどんな事を学んできたか、ふりかえってみる

春　　村田　俊治

いよいよ春だ　そうだ、ぼくたちにも春がくる
ぼくたちの春といえば、中学生になることだ
うれいしい春だ

希　望　　常山　輝夫

青空をみてみると、むくむくとわいてくる、希望
それが、ぼくらを、勇気づける　希望を持ってがんばろう

一番すきな季節　　畑　　雅克

ぼくのすきな季節は春、夏、秋だ
春は、花がさいてきれいだ　夏は、水泳でおもしろい　秋は、スポーツでおもしろい

おとなになるんだ　　舘　　秀明

中学校　ぼくたちは、おとなになるんだ
電車、いろいろの物がおとなになるんだ

登　校　　大崎　和夫

家を出た　寒い、寒い、すごく寒い　学校までかけ足だ
上がったり、下がったり、見わたすかぎり、雪の山
もうすぐだ、もうすぐだ、やっと学校についた

ドビン　　吉村　照夫

ひらりんの上にのせておくと、しばらくたつと、ブンブンと音をたてて
ふたが落ちるほどの強さで、フットウする
ゆげがボーボーとでる　まるでドーナツのようなゆげが

卒　業　　鈴木　　衛

もうすぐ、卒業にちかづいた　もう長いあいだ、小学校にいた
みんなともおわかれをしなければならない
小学校よりも、中学になったら勉強がなかなか、むずかしくなる
いまからがたいへんだ

校　舎　　舛田　　明

もうすぐ春がくる　春がくると卒業だ　小学校の校舎ともお別れだ
古くなった校舎　おとなになった時、きてみたら、どんなになっているだろう
今のすがたとは、にてもにつかない物になっているだろう
すこしでも今の、おもかげが、あってほしいものだ

恩　　三国　仁司

この六年間、ぼくたちにいろいろおしえてくれた先生、たいへんありがとうございました
ぼくたちは先生に教わった事を、平和のためにつかい、野口英世はくしのような
りっぱな人になりたいと思います。

別　れ　　松本　武夫

ぼくたちは大きくなってから、友だちとあうかしら
又、友だちと会ったら、話をしてから、又別れるだろう

卒　業　　麻木　啓二

卒業するとき、はく手されたり、したりする
ざいこう生も卒業生もだまっている　開会式、校歌、君が代、いろんなことがすんで
一番いやなのは卒業しょう書をもらうときだ
なぜかというと、はずかしいからだ
閉会式がすんだら、先生からの話をきいてかえり、二、三週間で中学へ入学だ
卒業生はいそがしい

こいのぼり　　杉田　夏代

するするとたれながら、はたざおを登っていくこいのぼり
上で風車がまっている　すいすいおよぎはじめた
ふるぼけた色のこいのぼり　今年かったばかりのこいのぼり
町を歩くと色々のこいのぼりが、青空いっぱいに、およいでいる

ブルトーザー　　梶　喜美子

「ガラガラ」と音をたてて、ブルトーザーが雪をとっている
「五時まで、家にかえれないのかなあ」と他の家の前でまっている
五、六分たつと除雪をしていた父が、連れに来た
安心して家に帰った

お母さん　　北村裕見子

わたくしのお母さんやさしいけれども、
わたくしが言うことを聞かないと、とても怖い顔をする
わたくしは、もっとよいこになろう

おとなになってから　　藤本　詠子

わたしたち、おとなになって会った時、六年生のことを思い出すだろうか
そして、そのときの思い出は、どんな事だろう

美しい心を持って　　松田　照代

花のように美しい心を持って、みんななかよく楽しく、りっぱな人になり
美しい心を持って

学校から帰って　　今西　啓子

わたしは、学校から帰って来て
お母さんに、お金をもらって、おかしをかいに行きました。
家に帰って来て、テレビを見ていました　こたつに入ってテレビを見ていました

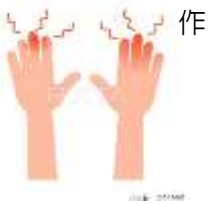
中学校で　　吉本　慶子

私は、中学校へ行って、うんと勉強して、先生におこられないように
がんばりたいと思っている

人間と犬　　南谷真理子

人間には、人間のことばがある　犬には、犬のことばがある
人間は、人間のことばがわかるが、犬のことばは、わからない
犬に、「おすわり」とか「お手」とかいうと、そのとおりに犬はするが
犬が、「ワン」とか「キャン」とかいっても、どういっているのかわからない
人間に犬のことばが、わかったら、おもしろいなあ

しも焼け　　作田　純子



手をすぼめても、手がかじかんで、うまく、えんぴつがもてず
手の間から、しるが出てきていたかった

雪　　富田　　了

雪がふって、やねの雪おろしが、たいへんだ　　さあ、あとーいきだ

春　　吉川　幸子

早く雪がとけないかなあ　雪がとけたら春がくる
そしたら、中学校へ入学できる　だから、早く春が、こないかなあ

卒　業　　山形加代子

もうすぐ卒業だ　六年間みんなといっしょに暮したこの学校
お母さんと初めて来た時、窓から見えていた、あの小さな木も
今は、もう見上げるほど大きくなっている
私は、あの木にまけないほど大きく成長しただろうか
中学生になったら、きっと追いこして見せる

卒　業　　清水真希子

こよみをくってみた　今日は、二月十七日、あと三十四日間で卒業だ
でも、それまでの学校の休みが、五日間もある
学校へ通うのは、あと二十九日間
中学へいくのはうれしいが、小学校とわかれるのは悲しい　でも、しかたがない
国語の本を読んだとおり、別れるこのさびしさは、たいせつな心のかていなのだ
私は、あと少しの小学校生活を、六年生らしくりっぱにすごそう

う　め　　佐藤美枝子

家の庭の横にうめの木があった　小さな小さな芽が出ていた
豪雪のためうめの木がうまってしまった
その小さな小さな芽は、春をむかえようとしていたのが、豪雪のため、小さな命は
どこかへ消えようとした
母が小さな命が、危ないと言ってげた箱の上においた
小さな小さな命は、又、春をよんでいる　遠く遠く　小さな命が……

雪の夜　　山岸　好恵

雪の道を走った　やかんを持って走った　暗やみの中を走った
お父さんの入院している病院に向かって、走った
やがて、あかりが、見えて来た
病院のあかりが近づいて来た

えんぴつ　　山内むつ子

わたしは、えんぴつばかり、けずっている
そうでないと、いい字が書けないから、えんぴつをけずっているのだ

雪　　谷口　康子

朝おきたら、雪が、つもっていた　母はせっせと雪かきをしている
私も、母にてつだった　母は、にっこりわらった

別　れ　　浦　　洋子

長かった小学校とも、お別れだ　こんどは、小学校よりも短い中学だ
短いけど、勉強は、むずかしいから、がんばってやろう

卒　業　　山崎　澄江

あと一か月で卒業だ　でも、おとなになるには、だれでも、いかなくてはならない
私は、どうせいくなら中学でも、頑張って勉強しょうと思う

氷　　木呂場洋子

このあいだ、わたしが、屋根にある氷を、とろうとして手で、取りにかかったら、
氷のとがっているところにあたった
とてもいたかった　わたしは、氷を取るのをやめた

さぎょう　　坂　美栄子

きょう、さぎょうが、ありました
１グループと２グループ、３グループと４グループとにわかれて、雪わけをしました
男は、こうどうの横と後です　女は、中央ろうかの、まどを、みんなするのです

母とおじいさん　　東田美智子

私の家は、父がいません　家にいるのは、母と私と二人です
おじいさんや、孝一は、おじいさんの家でくらしています
私の家には、父がいないので、母が一人ではたらいています
おじいさんも、しごとをして、手の指を、切ったので、なにもできません
私は、ときどき、てつだいにいっています
私も、中学校を、卒業して、働いて、母やおじいさんを、安心させたいと思っています

6年 ひとり一言(六年三組作品) 3組

小学校で　できなかったことや　したかったことを　中学に行ってやりたい　内尾　祥映

白山のように　けだかく清く生きよう　小路　徹雄

スキーで　ことしの六年生は　速かったが五年生の　みなさん、
らいねんも　速い　きろくを　だしてください　織田　勇雄

五年のみなさんことしの六年生はあまりぎょうぎや勉強ができなかった
五年生のみなさん　ことしの六年生にまけずに　がんばってください　坂井　隆雄

中学校に　いったら　野球部に　はいって　おおきくなってから
野球の選手になりたい　土田　政明

ぼくは　大人になった父のあとをついで　医者にならなければならないかもしれない
やはり　なるために学校で　勉強するにあたって　中学での勉強はとてもたいせつなことです。もうすぐ　ぼくは、中学生になりますから　うんと、勉強しなければならないと思います。　織田　春樹

僕は　中学校になったらもっとがんばりたいと　思います
みなさんも　がんばってください　井上　　章

ぼくは六年間あまり勉強しなかったので　中学校にはいったらがんばります　早瀬　克人

ぼくの小学校生活で　一番感じたことは「自分の思ったことは　はきはきと　どんどんのべる」と言うことだ。在校生のみなさんといわず卒業するぼくたちもこのことを実行しておれば　いつかは　よいことがあると、ぼくは信じています　榊原　真澄

ぼくは小学一年のときはまだ勉強のことはきにしていなかったけど六年になって　やっとおもしろくなったり、国語がすきになりました。中学校にいったらきらいなものをがんばります　土谷　俊幸

ぼくは六年間三、四年生をいじめてきました。五年生のみなさん
ぼくのようにならないでください。これは卒業前のひとことばです　高畠　　勇

中学へ　いったら　ぼくは　卓球部に　はいろうと　思います　中村　　章

ぼくは一、二学期あまり勉強をしなかったから三学期にがんばろうと思ったら足を折ったので勉強ができなかったから中学校へいったらがんばりたいと思ってます　加藤　昭二

五年生のみなさん　よい学校にしてください　後　　重晴

ぼくは　六年になってから　日記をつけようと思ってもつけられなかったので
中学生になったら　毎日　日記をつけようと思う　中木戸英夫

ぼくたち六年生は　よく下級生に　いばってきましたが　こんど六年生になるみなさん、
どうぞ　下級生をかわいがってください　中田観世音

ぼくたちは　おおきくなると　みんなと別れるのは　さみしい　表田　勇

これからも　元気に勉強しよう　織作　峰生

ぼくは子ども会のことがあまりできませんでした　根崎　明義

ぼくはこどもかいのと五年生をたたきました。
五年生のみなさんはたたかないようにしてください　中村　久幸

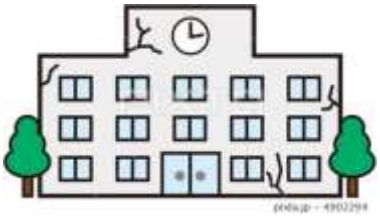
自信と勇気をもって　勉強にはげみましょう　ぼくらのこうはい　がんばれ　宮　要介

今年の大雪は、雪があるときはきえてなくなればいいと思い
全部とってなくなったらもったいないような気がした　小山　誠一

中学へいったらがんばります　山崎　三郎

子どもは太陽の子　ぼうのように　よろめかず　あかるく　よい人になろう　山橋　二郎

とうとう　あたらしい学校ができなかった　山本　峰三



早く新しい学校を作って　かよいたかった　大崎恵美子

獅子吼のもとで　りっぱな人間になろう　安田千代子

私は　三日ほどしか休まなかった。　三日と思ったらくやしくなる　北　登代子

私たちは　六年生になって　ものごとが　あまりうまくいきませんでした。
五年生のみなさん　今年はしっかりして下級生たちをよろしくお願いします　酒井外志子

五年生のみなさん　六年になったら　まえの六年にまけず
しっかりとがんばり　週番もがんばってください　山本るり子

五年のみなさん　私たちの希望だった良い児童会をきずく事を
みんなの手でりっぱにやりとげてください　仲村　澄子

人間にとって　うそをつくことが　一番むずかしいのである　一鉄小百合

私は中学へ行っても　しっかりがんばりますから
みなさんもがんばってください　作田とし子

中学へいったら　しっかりがんばります　片岡　光子

私たちが町学校を出てから　新しい学校ができる　うらやましいな　と思う
五年生のみなさん　小さい子のめんどうをみてあげてください
みなさん　からだをたいせつに　　北出　直美

こんど六年になるみなさん　私たちは　この小学校をあまりきれいにできなかったけど
私たちが卒業したら　私たちにまけない　よい学校にしてください　　喜多美千代

私はおおきくなったら　スチュワーデスになって　世界一周をしてみたい　　山岸　久枝

五年生のみなさん　私たちの学校をこれからも
よい学校にするようにつとめてください　　宮岸千賀子

五年生のみなさん　私たちはもうすぐ中学一年になります
小学校を明るくりっぱにしてください
そして　みなさんも　元気で勉強にはげんでください　　藤場真理子

もう卒業になりました　この学校は校しゃがふるいので　一年生のときから
学校をたてるといっていたが　私たちが卒業してから学校があたらしくたてられる
五年の子や　ことし一年になる子らはとくだ　とみんながいっています　　辻　　一代

苦しいときにも　希望をもとう　　山本千恵子

こんどあたらしい学校がたつそうです
五年生やそのほかのみなさん　学校をきれいにしましょう
五年生そのほかのみなさん　勉強にはげんでください
五年生そのほかのみなさん　運動をしましょう
運動をして強くりっぱなからだにきたえあげましょう　　長田　和子

毎日かならず一つは　わすれものをしてたから
中学校へ行ったら　なるべくわすれものを　なくしたい　　車　真知子

私は小学校にはいって　やっと慣れたと思った時　私は卒業するのだ　この六年間何を
覚えたでしょうか　学校へ行く道を覚えたに過ぎない　他に何があろうか……
家では予習復習をしたかもしれないが　それは六年間のちょっとにすぎない
これからもっといっしょうけんめい勉強にはげむよう努力したいと思います　上田　一枝

もうすぐ春です　春になれば　私は中学生になります
一生けんめいに勉強をします　　密谷　春枝

大雪や大水にもまけない　強い信念をもった人になろう
大志をもった人になろう　　松村　道子

作　文

遠足(先生記)

*　六年生になりたてで、気持ちがまだうきうきしていた。四月二十四日。*
六年生は雪の多く残っている月惜峠を越えて　後谷方面へ遠足に行った。
コースは　八幡　→　月惜峠　→　後谷　→　堂　→　風吹　→　金釼神社であった。
*　残雪の上を通ってくる風は　汗のほおに気持ち良く吹いた。ウグイスの明るい声*
清らかな川の流れ　アサヅケの感触　堂の発電所　つり橋……思い出すね。

えんそく　　高畠　　勇

　月惜峠から後谷の道が悪い道だったので、すべってころんじゃった。そしたらずぼんがべちゃべちゃになったので、みんながわらったので、ちきしょうとおもったがたたかなかった。なんでかというと、つるぎ小学校のはじやとおもって、たたかなかった。

　そしてから堂へいってから、ほかの人がさかなをもっていて、ぼくがなんのさかなかなとおもって、ちょっとみましたら、やく７センチのヤマメでした。そして、つるぎ中学校の後ろの山をとおってかえってきました。

先生が、わかれてもいい、と、言ったので、ぼくは走って、川の方へおりて行った。そこに、リュックサックを、おいて、学校を見に行った。

この学校の講堂は、ぼくたちの、学校の、ひかえ所よりも、小さいのでびっくりした。「こんな小さな、学校で、みんなはなにを、ならっているのかなあ」と、思った。

運動場を見ると、みんなが、おにぎりを食べているので、ぼくも自分の場所にもどって、おにぎりをたべた。ぼくの横にいる山橋君が、おにぎりを食べながら、ぼくの顔を、ジロジロ見るので、ぼくも、ジロッと見てやった。すると、山橋君が「ハハハハハ。」と、わらいだした。

少し、おにぎりや、おやつを、たべていた。だいぶ、たべ終わって、ふと、後ろを見ると、一組の山元君が、川のふちの方で、なにか、していた。「魚を、取っているのだな。」と、思ってすぐ小さな、アミとナイロンの、ふくろを、もって、そこへ行ってみた。やっぱり、山元君は魚を、取っていた。「中木戸、ここに、ゴリおるげぞ。」と、言ったので、ぼくも、さがしてみた。なかなかでてこないので、あきらめて、帰ろうとした時、「山元君が、「あっ、おったぞ。」とさけんだ。見ると、一ぴきのゴリが、石のあいだに、かくれていた。もって来た、小さなアミを、山元君に、かしてやると、アミでゴリをすくった。ナイロンのふくろの中に、水を入れて、ゴリを、入れた。

ぼくは、おもしろいので、また取り始めた。すこしすると、こんどは、小さな、イワナが、泳いできた。イワナは、細長いので、アミを、かぶせても、アミの目の間から、にげてしまう。それでとうとうイワナを、にがしてしまった。そして、そのイワナは、あきらめて、また取り始めた。

石をまくったり、草の間を、手で、さわったりしていると、ゴリが石の間に、かくれているのが、見えた。そこで、ぼくは、山元君に、「としちゃん、ゴリおったぞ。」と、言って、アミをかしてやった。山元君は、ゴリを、アミで、すくった。ナイロンの、ふくろの中に、入れると、今取った、ゴリの方が、少し大きかった。

その時、集合のフエがなった。

旅行(先生記)

バスのガイドさんの説明に　あっちを向くやらこっちをむくやら……楽しい一日を過ごした旅行は五月十一日だった。

吉崎の「嫁おどし」の面の話や、丸岡城の人柱となった女の人の話で　おそろしくなったり、七十余棟もあるという永平寺の大きさにおどろいたり、東尋坊の絶景に目をみはったり　海女の貝取りを珍しがったり、松島の水族館を見学したのも　つい先日のように記憶に新しい。

もう一度　思い出を歩いてみよう

丸岡城 織田　春樹

まちにまった六年生の、修学旅行は、五月十一日さつき晴れにめぐまれて行われた。吉崎ご坊を見学した後、バスは丸岡城に、つきました。

この城の人柱となったおしずの悲しい話を、ガイドさんから聞いて、遠い戦国時代を思いうかべました

ぼくたちは、前にいた加藤君と、話をしながら、なだらかな坂を登って天守かくにつきました。山本君が、ぼくに、「この城のしゃちは、本物のきんか。」とききました。ぼくは、「この城のしゃちは、たいていメッキやろう。」とこたえました。その城は、戦いにそなえて、てっぽうを、うつための、あなもありました。またその城で、木で作ったまども、あけてありました。天守かくは、石がきの上に、三がいだてに、作られ、はい色の石がわらがにぶく光っていました。

ぼくたちが考えていたよりも城は、小さいが、先生の、お話によると、昔は、堀もあり、もっと、りっぱな城だったでしょう。

城から下の方を、ながめると、人々の家が、たちならんでいるが、その春の光に写る丸岡城を、ながめて、霞ヶ城と、なづけたのもほんとうだと思いました。

この城は、昭和二十三年の福井地震で壊れたのを、昭和二十五年に、ふたたび、たてなおされ国宝になっているそうです。

丸岡城のまわりに、たぬきとさるが、おりに入れられていました。それを見てから、城へ上がる道をおりてからバスにのる順番にならんでバスに乗って永平寺にむかって出発しました。

丸岡城　　北　登代子

「あっ、城だ。」と、私は心の中で言った。丸岡城が、どうどうと高くたっている。バスからおりて城の坂を、登って上をみたら、とっても、大きいのでびっくりした。

城を見るのは、めづらしくないが、丸岡城のカワラが、石ガワラと、ガイドさんや、しおりに書いてある。

私は思った。どうして、石ガワラをしたんだろう。どうして、あんなにうまく作ったんだろう。と、言うことだ。けれども金沢城から見たらやっぱり、ちがう。

城のてっぺんを見ていたら、浦の洋子ちゃんが走りながら手を、ふって来た。そして、洋子ちゃんが、「むんぬん、高いねー。」と、言ったので、わざわざ「あたんまいや、城と言う物は高いもんなんや。」と、先生のつもりで言ったら、洋子ちゃんが「あはははは ー。」と、わらったので、私もわらった。

そして、あたりを見おろした。丸岡城からは、一目でみえる丸岡の町がきれいだ。又、丸岡城の横にある、きたないあなは、生まれてから初めて見るあなだ。何のあなか、知らないが、うまく、深くほってある。私は、井戸かと思っていたら、ほかの子が、「にげ道やなあ。」と、言っていた。

それから又、城を見た時、男の子が五、六人かいだんを走って上がった。私は、何をするのだろう思って、じいっと見ていた。すると、五、六人の二人が戸をあけて中を見ていた。私もかいだんを、走って上がって見ようとしたが、なかなか見れなかった。私は、あきらめてかいだんを、おりて来た。

それから、丸岡城のすぐ前にある動物を見てバスの所へ向かって歩いた。

丸岡城を、一目見て、さあ出発。

松島水族館　　内尾　祥映

三時半か四時ごろに、松島の水族館についた。門の外から見ると、水族館が、あるとは、とてもおもえなかった。なぜかと言うと、ぼくは、地下にある水族館かと、思っていたからだ。

門の中に、はいってみると、前の方に、動物園があって、横に水族館がある。中にはいって、まっさきに見たのは、サメとカメだった。其のサメのはらだけが、ほかのサメとちがって、もやもやとした、もようがあった。カメの方は、とてつもないでっかいかめだった。おとぎ話の、浦島太郎にでてくる、カメのようだ。テレビで海ガメのタマゴをうむのを見たが、ほんとうに大きいカメだ。

どれもこれも実さいに見るのは、はじめてなので、みとれていると、「ひやっ。」としてとびあがるほどの、うすきみのわるいカニがいた。うす赤いような色をした、足の長いわりに、からだが、あまりに大きくないが其の長い足を水そうのガラスをわって今にも出て来そうなきがした。

二階に上がって熱帯魚を見た。その中には、目のない熱帯魚もいた。その魚は目がないのにどこにもぶつからないですいすいと、およいでいた。なにか目のかわりをしているのだろうとぼくは考えた。しらべてみようと思う。

それから、動物園にむかった。水島を見てから、イタチの、小屋の前を、とおると、なんともいえないくさいにおいがした。あんまりくさいので、ライオンの所へいくと、カンバンに「このライオンは、オリの外へしょうべんをこくから注意してください。」とかいてあった。しょうべんをこかれると、こまるので、こんどは、うさぎが、はなしがいにしてある所へいって、うさぎをだいたら、なにを思ったのか、ぼくの手にかみついた。きっと、ぼくは、うさぎに、あまり、すかれないのだ。それから、チンバンジーの所へいって、アクシュした。チンパンジーの手は、とてもあつかった。テレビのセンデンのように、チンパンジーが、ほんとうに話をしたら、もっともっとおもしろいのにと、思った。

そして帰りのバスにのりこむ。

「ワァーッ」とってもきれいなオナガ鳥、長さ二メートル三五センチの長い尾、その横にはまっこうくじらのあご、体長一九・五メートルという長いからだ。

中の方に入っていくと、カメが五ひきもはいっていました。中にはせまいのに大きいカメが、五ひきもはいっているので、海のように自由に泳ぐことが、できないのでこうたいこうたいにして泳いでいるようだった。カメたちの中にはサメもはいっていました。サメはおなかの所にけむりのようならくがきをしておりました。サメの仲まには、ネコザメといって、長さ十五センチの物もいました。ゆうれいぼやは、ほんとにゆうれいのように、白のすきとおったうすい物でした。

かぶとがには、瀬戸内海のてんねん記念ぶつとかいてあるし、ほんとにかぶとのようなかたちをしていました。なまこは「あれ花んないけ」といってまちがえるくらい花のようにきれいでした。たかあしがには五十～百五十とかいてあるとおりとても大きいかにで、私がずうっとまえに、食べたかにに、とてもよくにていました。

まだこは、泳ぐのを見たかったのに、私達がいたせいか泳がずにガラスにひっついていた。それにおおさんしょう魚というのがまたすごいので、人間のように手足が、二本づつあって、どじょうの大きいのみたいでした。

しゅぶんきんは、黒とかき色のぶちの、きれいなきんぎょで、私の見たことのないようなきんぎょでした。

にかいの方へあがると、ねったいぎょや、貝などが、たくさんありました。山あらしなどが、はくせいにしてありましたしそれにたつのおとしごもいました。

遊びばの方には、コバタンというかわいいおうむが二わもいました。くみちゃんが「今日は、今日は」といっているのに、ゴパタンは、二りでつつきあいをしていたので、くみちゃんは、「なーん、ひとつもしゃべらん」と、いっておこっていました。　また時間があったので、まきちゃんとぶらんこにのったり、シーソーにのったりして遊びました。

帰りには、組べつにわかれて、先生にしゃしんを写してもらいました。

想い出の先生(先生記)

母の手をしっかりにぎって、入学のよろこびを味わったあの日から、数々の思い出をこの校舎に残して、いよいよ元気に巣立つ日がきました。
ほめられたり、しかられたり、ふざけたりした先生の思い出も一人一人の胸の中にそっとしまってありますね。
苦しい時、悲しい時、先生にはげまされた言葉を思い出して、くじけることなくがんばりましょう。

向先生のこと 早瀬　克人

僕は一年生にはいったとき、向先生にもってもらった。一学期の時はあまりおこられなかったが三学きはおこられた。おこったらすぐ足をしばって後むきにさせられたことがよくあった。

二年生の時は藤島先生だった。そのクラスは今の二年三組のせきだ。

一年生の時はよく戸田君らと音楽室ですもうをとってあそんでいてよくしかられた。この六年間で一番勉強のしやすかった時だと思った。

今の一年生の先生はあまりおこらないが向先生はきびしかったのでよかったと思っている。今でもきびしいが向先生のおこり方は一年生にとってはちょうどいいきびしさだったが、それから二年間たったときに死んだ。ぼくはさびしいなと思った。

向先生　　密谷　春枝

私は、二年生の時、一組でした。受持ちの先生は、向菊江先生でした。色々な思い出があります。

その中でも特に楽しかった事は、春の遠足の時でした。その日は気持ちのいい日本晴れで、みんなうれしそうに、野道をあるいてやっと目的地につきました。

私は、昼のお弁当を、友だちといっしょに向先生のところで、食べました。その時、私のおにぎりが、土手の上から、コロコロと、ころがりおちました。みんなは、口の中から、食物がとびでるほどに、大わらいしました。向先生は、自分のおにぎりを、一つ私にくださった。私は、とてもうれしかった。そのかわりに私は、向先生にお菓子や、キャラメルを、あげました。先生はよろこんでありがとうと言っておいしそうに食べていました。私はそのときのことは、いつまでも思い出としてわすれることはできません。

その先生が、もうこの世にいなくなったことは、悲しいことです。勉強のときでも、わかりやすく教えてくれました。算数の時間に、わからないときは、のこして、わかるまで、教えてくれました。

でも楽しい時の先生はとっても、ゆかいです。また、その反対にとてもきびしくするときも、ありました。それからもう一つ私のかんのことは、向先生は、なんだか、おかあさんのような気持でいろいろしつもんできました。

でも、もう義務教育も、六年間すぎました。これからは、中学へ入学します。そして、もっと、もっと、体を強くして、勉強やそのほか、色々な事を、やって、見たいと思います。小学校での思い出を、みんなは、ぜったい、わすれないでしょう。

向先生　　喜多美千代

私は、一年一組で、向先生でした。向先生は、私を、とてもかわいがってくれました。二年のときも、向先生だった。

そして、二年を終るとき、先生が「これで、おわかれね」と言った。私はとても悲しかった。先生が、学校をやめるといったからです。先生が、「いまから、ちょい　ちょい　あそびにきてね」とおっしゃいました。そしたら、松村のみっちゃんが、先生のうちしっとるといった。みっちゃんは「先生のうちへ、おさかなをもっていこう」といった。先生は「そんなことしなくたっていいのよ」といった。みっちゃんはてれていた。

それからいく日かたって夜ねるとき、向先生のゆめばかり見ていた。さいしょのゆめは先生が私の母だった。母(先生)は、医者になって、かんじゃを見ていた。私が、学校から帰ると、いつも、おやつをもってきてくれた。いつも、おいしいものばかりたべさしてくれた。私は母のてつだいをしたところで、目がさめた。私は、あんな母がいたらいいなと思った。

それから、私は、あまり先生を見なかった。おかあさんが、大和へ、かいものにいったとき先生にあったといったとき、私はうれしかった。そしてきいたら、先生が「みちよちゃんおげんきですか。」といっていたと母がいった。私は、とてもうれしかった。

それから、私は、六年生になったときに、向先生が、いがんで、しなれました。私たちは、そのとき、家庭をしていたときだった。橋先生が、おそう式にいかれました。

私はとてもびっくりしました。私は、向先生に、とてもあいたかった。

山本先生　　藤場真理子

わたしの三年のときの先生は、「山本先生」だった。山本先生のあだなは「かば」といいます。そして、三年一組で、りかの、時間に、あかいかおをして、「コケコッコ」といった。みんなが、わらった。その、まねは、とてもうまかった。

わたしの一、二年の、先生はかわっていったから、せめて、三年の先生は、かわっていかないようにと、わたしの心のなかで思っていたのに、三年の先生もかわっていった。

わたしは、そのとき、世の中うまくいかないものだなとおもった。

そのことはいまでも思っている。

山本先生とぶつかったとき　　小山　誠一

ぼくが、三年になってから、ちょっとたったときでした。ある日の朝、左右どちらも見ないで、道に出たら、自転車と、ぶつかった。その自転車に、乗っていたのは、思いがけなく、受持の山本先生だった。先生は、ぼくを、おこして、「どうもねかったか」と聞かれたので、「どうもねかった」と言ったので、先生は安心して、学校へいかれた。

そのあと、ぼくが学校へいって、勉強しているとき、ぼくが、いたそうにしていると、先生が、「ほんとにいたくないのか」と、聞かれたので、「いたい」といったら、先生が、細川につれていってくださった。ぼくは、細川で、何かいたい事でもするのかと思った。だけど、ぼくは、けがをして、細川に、はいったことは、なんどもあった。

保育所のときは、半円の形で、はしごみたいな所に、のぼっていって、まん中あたりで、下におちた。下におちて、口のところが、地面にあたって、口が、もじってしまった。一年のときはよくおぼえていないけど、二年のとき、つくえのよこから、足をだしていた人がいて、その足に、かかって、たおれた。その時、つくえのかどに、目のちょっと上のところが、あたった。そして、病いんで、三はりほどぬいました。それから、間もないとき、隆雄ちゃんと、遊んでいて、すべってころんだ。そのとき、手をけがして、手をつっていた。学校へ、行くと、となりのせきは、あらさきさんだった。夏だったので、薬のにおいがして、となりのあらさきさんもいやがった。ぼくも、へんなにおいやなと思った。まだ、けがしたこともあるけど、思いだせないから、書かないことにした。

これだけけがして、細川によくいったので、こんどもどうもないだろうと思っていた。そしてはいったら細川の先生は、これは、ただの、うち身ですよと言ったので、よかったと思って、学校へいった。

思いでの　先生　　宮　　要介

ぼくの、小学校六年間の、うけ持ちの、先生は、一年生の時は、加藤先生、二年生の時は、藤島先生、三年生の時は、堀先生、四年生の時は、福岡先生、五年生の時は、東先生、六年生になって高鍬先生、こういうふうに、うけ持ちの先生が、かわりました。

では、今から、一番いんしょうのふかい先生のことを書いて行きます。その先生は、三年の鴇のうけ持ちの先生、堀先生のことです。

夏の夕方、ぼくと、おじいさんが、つりからかえって来たら、家庭ほうもんで先生がきていた。先生が、ぼくたちのつって来たあゆを、見て、こう言いました。「ほう、このあゆだいぶ大きいなあ。だいたい十五センチぐらいあるねえ」と言ってあゆの話をしました。ぼくは、先生が、先に学校の話をしたのを、しらなかった。しばらくの間先生と、みんなで、あゆの話をして、先生は、かえった。

あくる日、学校でぼくは、じゅぎょう中大きな声で、「あのなあ、先生なあ、わしんとこの家に来てあゆの話ばっかりしとれんざあ」と言ってしまいました。家にかえってこの事を、母さんに言ったらこっぴどくしかられました。だからぼくは、「ほんでもほんとやもんの」と言ったら、母さんが、「要介と言ったら、だらやぞね、いらんことばっかり言って、先生なね、先に学校のことほうこくしてからあゆの話をしたんやぞわかったか、今度からぜったいにそんな事言うことならんぞ」と言ってしかられた。

だからそのかいあってか、今ではそんな事は、あんまりかるはずみにいいません。

先生は、ぼくがあんな事言ったけど、ぜんぜんしからなかったけれど、いやな気持ちだったろうと思います。それがとうぜんでしょう。

ほかの先生方もそう言われたら堀先生と同じ気持ちだったろうと思います。ぼくは、いつも、この事件を思い出すと、堀先生に、すまないなあと思いました。

六年生になった時の、一学きぼくは、ものすごくせいせきがさがった。その二学きのある日、堀先生から自分のせいせきを聞かれた。ぼくは、そんなはずかしいせいせきをいうのは、いやだったけどみんないった。それだけ、堀先生が生との事をしんぱいしているのも、やっぱりいい先生だからだろうと思います。

福岡先生 上田　一枝

四年生の時、もってもらった福岡先生は、兄が、六年の時、もってもらいました。福岡先生は、わたしを、はげまし、勉強ができるようにしてくれました。わたしは、福岡先生がだいすきです。もちろん高鍬先生、小石先生もすきです。

でも、勉強がすこしできるようになったのは、四年生の時からです。わたしは一年のときから、三年のときまで、運動会の時のはしれっこで、一番さいごでしたが、福岡先生が、「一枝リレーに出んか」と言われた。私は「はしれんもんの」と言ったけれどもえらばれた。えらばれたので、一回運動場で、はしったら浅井のみよちゃんとわたしと、出ないのになった。それからは、はしれっこは、四番か、五番になりました。

国語の本も、大きな声でよむようになった。算数のテストもよくなったし、授業中もよく手を上げるようになりました。そして、五年になって、さがり、六年になった。

六年の時は、高鍬先生になりました。りょこうの時、おやつをたくさんもって行ったので、先生におこられました。もちろん、わたしが、わるいのです。おこられたので、なおよかったと思います。わたしは、おこることなんかありません。先生が、わたしの悪いところをなおしてくれるのですから、おこられてしあわせです。わたしはおこられた日は、ぷんぷん顔がふくれましたが、はんせいしてみました。

三学期になって、先生が足のほねをおった、と聞いてわたしは、ドッキンとした。どれだけいたかっただろうと、思います。先生がないたかもしれません。まだ先生がないたのは、見たことありませんが、ほんとうになけたと思います。

そして、南田先生、たき本先生たちに勉強をならいました。でも、三学期になって、受もちの先生がいないなんて、とてもざんねんだと思います。

それから雪がふりつづきで、なんべんか、やね雪をおろしました。それで学校が、休みでした。だいぶ雪がやみ学校へ行くようになりました。しばらくしてから新しい先生が来ると言っていました。

わたしは高鍬先生が、だめなのかな、と思いました。安田さんにきいたら、「三月から来る」と言うので、いっしょに勉強できるのでよかった。卒業式も、ちかづき、勉強する日が少なくなり一日も早く、高鍬先生の来るのを、まっているのです。

福岡先生 車　真知子

いまでもおぼえているのは、四年のとき、福岡先生に、はなしをしてもらったことです。とってもおそろしい、はなしをしてもらった。

そのはなしと言うのは、よるになると、昼のときはしてもらったことをおもいだすととてもねられそうもないはなしだった。いまでも福岡先生にあうと、四年のとき、はなしてもらった、こわいはなしをおもいだす。そのために、その夜はなかなか、ねむれなくて、朝は、かならずねぼうをしていた。

ちかごろは、とてもおかしいことが多いので、福岡先生の顔をみてもあんまりかんじない。よるは早くれられるし、朝は、ねぼうをしたりしなくなった。

また、おもしろいはなしをしてくれたこともあった。ときどき、おもしろいはなしをしてくれたときのことをおもいだして、朝は、早くおきられることもあった。

江村先生

仲村　澄子

一口に「思い出の先生」とあっさり言うが、六年間この学校で教えてもらった先生は、私にとっては、みんなみんな思い出の先生だ。

その中でも、四年生の時に習った、「江村先生」

江村先生はおこると、とってもこわい。けれども、おこらない時は、とっても、やさしかった。みんなは、「江村先生はおこるから、きらいだ」とよく言っていた。私も言ったことがある。でも私は、ふだんの江村先生なら大好きだ。江村先生はとっても授業熱心だ。

私は遠足に行った時、先生におかしをあげた。みんなも、先生におかしをあげた。先生は、「おししい、おいしい」と言っておかしを食べられた。私もみんなも先生がおかしを食べられたのでとってもうれしかった。なぜうれしかったか、わすれたけれども、そのあと、みんなでひめ神社の横の遊び場で遊んだ。先生は何もしないでゆっくり後ろに手を組んで、みんなが遊んでいる回りを、にっこり、笑いながら歩いていかれた。まるで、「よく学んで、よく遊べよ」と言っているように「先生はとってもえらいなあ私も大きく、なったら江村先生のような先生になりたい」と思わすには、いられなかった。みんなも江村先生のやさしい所を、見ているのだから、そう思っているかもしれない。

もっともっと江村先生といっしょに勉強したかった。でもそのとおりにはならなかった。「一年って短かい物だなァもう少し勉強したかったのに」

そう、進学だ。先生にも、もういっしょの、クラスを、持ってもらえない。私は頭が良い方ではなかったので、もう一年持ってもらいたかったのに。

先生の授業時間のやり方や進め方、やさしかった時のことを今も思い出す。

五年生の思いで

北出　直美

五年生の三学期、私と、松村さんと、さとうさんとで、私たちが六年生になるとき３人で、ふじ島先生にブローチをあげようと思いました。

そのころうちの家でもくるみわりをしていたので、うちの家のくるみわりをてつだってもらったおかねをためて、かうことにしました。それは、五年生のときに私たちがうけもってもらっていたからなのです。それからなんしゅうかんかたってだいぶおかねがたまったのでブローチをかうことにしました。

私はみいちゃんをさそってから松村さんの家にいきました。松村さんがいなかったので、まつむらさんにわるいと思ったけどしかたがなかったので、私とみいちゃんとで、田村へブローチをかいにいきました。

すごくきれいなのがあったので、それをかって学校へいきました。ふじ島先生がいなかったので、てがみをかいてブローチといっしょにふじ島先生のつくえのなかへいれてきました。そのことを松村さんにおしえてあげました。

それからなん日かたって六年生になるときにふじ島先生が私たちがあげたブローチをしていたので、私とさとうさんと松村さんとかおをみあわせてにこっとわらいました。そのとき私たちはとてもうれしかった。そのとき、先生のブローチがきらきらとひかりました。そのときはとてもうれしかった。

谷内先生　　大崎恵美子

私が、五年生のときの先生は、谷内先生だった。先生は、よく私たちを、わらわせたけれどときどきおこったときは、とてもこわかった。家がちかくなので、ちょいちょい合った。私は、いやだな、と思った。

ある日、横にすわってる子が「ちょっと、みてみまっし」と、言ったので、見ると、先生が、足を、ゆすぶっているので、おもわずふきだしてしまった。スリッパを、ぬいで、かた方の足へのせて、先の方を、うごかしているので、とてもおかしかったのだ。横の子が「びんぼうゆすりや」と、言ったので、よけいおかしくなった。私たちが、くすくすわらっていても、先生は、しらんかおを、していた。

ときどき、おもしろい話とか、こわい話とかを、してくださった。こわい話をするとき、「こんばん便所いけんがになるぞ」と言ったりして、よけいこわがらせたりした。話をしている時、こわい所にくると、私たちが、いっしょうけんめい聞いてると、急につくえを、たたいたりして、とてもびっくりさせたこともあった。

先生は、ぐあいがわるいので、いつも私たちだけで、体育をした。秋ごろは、男の子と、ときどき野球をしたりするようになった。じどう会やいろいろなことで、とてもいそがしく、私たちは、自習をしたこともあった。

社会のときなど、戦争のことを、言うとき、どこへ行って来たかと、言うことなども、おしえてもらいました。

先生は、私たちの町のこどもかいの人だったので、新年会などで、えい画を、うつしてもらったりした。家庭科も先生がおしえた。私はちょっと、たよりないな、と、思った。女の先生に、ならって、私たちにおしえて、くださいました。

りょう理の時は、ほかの先生がきて、おしえてもらった。作ってからみんなで、先生に少しずつわけて食べた。先生は「とても、うまい」と、言って、くださったので、私は、はじめての料理だったので、自信がないな、と思っていた。おせじだろうと思ったけれども、うれしかった。

いままでの先生

坂井　隆雄

ぼくの一、二年の時の向先生は、とてもいい先生だった。それなのに、ぼくの三年生になる時かわって行ってしまった。

それから山本先生になって山本先生は月曜会の時、いつも、便所のことばかりいっているのでみんながおかしかった。

それから、だいぶたって、向先生はしんでしまった。ぼくのかあちゃんは、いつも向先生の所へ田うえに、いっていたが、しんでしまったから、とても、いやなかんじがした。

ぼくは、山本先生の時は、長森君や戸田君や早瀬君らと山本先生の所へいって、あそびにいってぐみをもらってあそんできました。山本先生もぼくの五年の時にかわっていってしまいました。

四年生をもってくれたのがおなじみの福岡先生だった。福岡先生は体育の先生でスキーがとてもうまかった。一九六三年の(今年)国体のスキーに、選手として、十回目の出場をされた。ぼくは、ラジオで国体のスキーのことはきいていたが、あまりくわしくはしらなかった。福岡先生は、夏はサッカーかバスケットをおもにおしえてくれた。

五年生の時は東先生だった。東先生のあだなは、スーパーマンだった。からだはじょうぶで、メガネをかけているからそっくりだった。

五年生がすぎて六年生になると、まだ、六年生でないようなきがした。六年をうけもってくれたのは、高鍬先生だった。ことし、ししく高原で、足を折ってしまった。ぼくは二度おみまいにいった。おみまいにいくと、おかしがあたった。

学校では、高鍬先生のかわりに、きょうとう先生がこられた。もう一人、女の先生がいた、音楽は土曜日は中本先生であとは、たちばな先生がおしえてくれた。

そのあと、高鍬先生のかわりに、江村先生がこられた。江村先生はきがみじかいので、すぐおこるので、おとろしい。

音楽は前といっしょだった。もうすぐ、卒業でむねがドキドキしてくる。

図書部の先生

織作　峰生

ぼくが四年生になった時、本をぼつぼつ読むようになった。あくる日ぼくが本をかりにいった時、図書の先生秋田先生がいた。

ある子が館内の本を先生にどうしても必要だからかしてくださいと言っているようだった。先生は、かしてやった。ぼくは、「やっぱり図書の先生だけあって良いとこあるなあ」と、思っていた。ぼくはそのころ本をかり始めてから、あまり日がたっていないので、館内の本がどうしてもいるなら先生にそうだんすることと、いうことをしらなかった。それだけ、ぼくの頭は、働いていなかった。

それからちょいちょい館内の本をかりに来る子があった。ぼくも、かりたい本があったけど、ぼくは、ちょっとはずかしがりなのでどうもうまくいかなかった。しかし、一回だけ図書部の係員に「先生にたのんでくれないか」と聞いたら「ちょっといやけどいいやろう」といってかしてくれた。

そして五年になり六年になったある日のこと、体育の時間だった。みんな講堂に入った時、一部の友達がマットを入れてある室の中にはいって遊んでいた。するとそこへ秋田先生が通りかかった。秋田先生がマット室の方を見ていた。その時ぼくと土田君と教だんの上で話をしていた。すると「土田！」と、ものすごい声で、秋田先生がどなった。先生は近よって来て、なにもしない土田君にやつあたりしてるようにどなりながら、「なぜマットの上で遊んでいた」といっていた。そして帰っていった。

ぼくは、あんなやさしい先生も、時々おこりっぽい先生になるのだなあ、と、つくづく思った。

先生の思い出　　榊原　真澄

ぼくが、六ヶ年間に、教えてもらった先生は、一年と二年の時が、兼近先生、三年の時は、秋山先生、そして四年の時が岡島先生と江村先生、五年の時が藤島先生、そして最後が高鍬先生とほかの人より一人多い。その中でも、一番印象に残っている先生は、四年の時に受持ちだった岡島先生だ。なぜかというとそれはぼくが三年生の九月の時のことだった。

ある時、ぼくは学校が終わったので家で何かをしていたら玄関がガラガラとあいた。それで僕はまだ帰って来ていない姉が帰って来たのかと思い、「だれだ、だれだ、だれだ、だれだ」と、大きな声で言いながら玄関に出てみたら、ぼくの知らない人だったので、あわててなにも言わずにひっこんでしまった。でもあとあじがわるかったのであとで母に「だれだったの」と聞いたら母は、「芙美子の六年生の時の先生よ」と言ったのでぼくはびっくりぎょうてん、そして小学校の先生だからいつかはぜったいに顔を合わすだろうから、もし合った時どんな顔をしていようかと、なんだか不安になってきた。だけど、もし合ったらどんな顔をしていようかという心配は三年生の時はどうもなかった。でもやっぱり五、六回は合っていた。

ぼくはきがついていても先生がきがつかなかっただけの話だ。でも合わないでおこうということは無理なことだった。それにあたりまえだけれども、その中でも一番いやな顔あわせが来たのだ。

それというのは、ぼくの四年生の受持ちになったことだ。でもそれはぼくの見当ちがいだった。岡島先生というのは、やさしくて、ハンサムでとても思いやりのある先生だった。それでぼくは日がたつごとに岡島先生がすきになっていった。

ぼくが、このことから学びとったことは人という物に、一目だけでよい人だ、わるい人というようにかんたんに判断するということは、非常にいけないことだなと強く心に感じた。

自由作文（先生記）

この六年間に、みんなが書いた作文の中から、
ひとりひとりの印象深いものを選び出して編集しました。

事故に思う 山橋　二郎

先日、ぼくの家の前に、車が一台とまっていた。すると、むこうの方からオートバイが、すごく速いスピードで来たが、家の前に車があったので、いそいで急ブレーキをかけた。でも車の横の方にあたってバイクもろともはねかえった。近くにいた人がびっくりして、かけよって来た。でも、のっていた人はなんともなかった。だが、ぶっかられた車が、すこしへっこんだ。車のもちぬしははらをたててその人に、「この車はきょうはいったばっかで、へっこまして帰ったら、おこられるべんしょうせ」と言った。するとオートバイにのっていた人は、ぺこぺこ頭をさげながら「すまん」とあやまった。でも自動車のもちぬしは、また、べんしょうせと言う。

バイクにのっていた人は、こうふんして、「わしが、へっこましたっていうしょうこあるか。」と言った。自動車のもちぬしが言う。「そんな、だらなことあるかいや、ここにおる人はぜんぶ見たわ」と言った。

けっきょくその事故は、けいさつの人が来て、しらべ、オートバイに乗っていた人がわるいと、わかり、けいさつえつれていった。

はじめその人が、車のもちぬしの言うとおうりべんしょうすれば、その場でかたずいたのになあと、ぼくは思った。

でもそこにいた時、大げんかにならないかと、はらはらした。

うさぎ 山岸　久枝

今年は、うさぎの年だから、うさぎを取らないでほしいと思っておりました。ところが中学二年のあんちゃんが、山に、うさぎ取りの、わなをしかけてありましたので一ぴきかかりました。あんちゃんが大喜びで、向いのあんちゃんに見せに行きましたら「毎朝いったかいがあったな」とほめていましたが、あとで「うさぎ年だから、よい事ないぞ」と、おどかしていました。私はほんとうだと思いました。

それから、あんちゃんが、うさぎのかわを、むいているところへ、おとうさんが、お仕事から帰って来たので、おとうさんが、料理をしました。

夕食は、みんな、あんちゃんのおかげで、ごちそうに、ありついたと喜んでいました。とくに、おとうさんは、お酒を一ぱい、よけいにのんでいました。

私は、少しも食べなかったので皆んなが「久枝、うさぎ年にうさぎの肉を食べないと、良い事がない」といって大笑いされました。

まがり角 根崎　明義

六年生の夏休みのときのことだった。

自転車で本町へつかいにいった、帰り道に本町の四つつじにきた。行くときはとまったのに、かえりには、じゃまだったのでとまらずにいこうと思った。やはりしんぱいなので角の家のガラスごしにみたらなにもこなかったので、行こうと思って道へでたとたんにキィーと音がした。横をみたら自動車がとまった。ぼくはからだのあせがいっぺんにでたみたいになった。ぼくが自転車を前へやろうかうしろへやろうかまよったが、すぐに自動車がうごこうとしたので、自転車をさげたら自動車がいったのでからだのあせが急にじょうはつしたようになった。

その日からまがり角でとまらずにいく人をみるととまればよいのにと思う。

雪

土谷　俊幸

こ年は大雪だった。一月はすこしくらいたまっていた。歩いても地面についていた。一月の終わりごろには雪が、家の半分までつもっていた。

ほくは、いちいちでるのがじゃまになるし、つかいでも、ものすごく遠いがに思うし、スキーどころのさわぎじゃないほど、つもった。家にいると、たいくつでいらいらする。そして、屋根雪を何回もおとした。

学校に行くとだれでもストーブのまわりばかりにいる。ぼくのざせきはストーブに遠かった。便所に行くとすごくさむい。

学校が休みになると、家にいてこたつに足を入れて本を見ていた。テレビもうつらないので、ラジオがおもしろくなった。とくにまんざいや話がおもしろかった。一週間ほど休みだった。

学校へ行くのになって、高い道を歩いて、学校へ行った。ストーブの横は、まどガラスがわれているのでだれでも手を出すと雪がとれる。それで、ぼくたちは、あたっていても、ストーブのそばにいるかんじがしない。

場所がえをしたとき、前から二番目になった。ストーブに近かった。そしておじさんがガラスをいれにきた。それで、うんがよかった。ぼくはやっとひと安心した。となりの中木戸君は、すぐ仲よしになった。

雪はブルトーザーでだいたいの所をとってしまって、大町はもう春みたいだった。

ぼくらの所はしたけれど、よこがかたくなっている。まだすこし、ふったりするけど、もうすぐきえる。

きじ

松村　道子

三年生の二学期ごろに、私たちの教室ではきじをかう事になった。とうきびなどをカナヅチでつぶしてえさにしてやった。きじの羽は、きれいで青や赤色などが光っていた。

当番は長グツをはいて、きじのふんをチリトリなどでとったりした。当番は前から順番で四人だった。

きじは栄養たっぷりで元気がよかったが私たちの番になるにしたがって、きじは元気がなくなったようだった。私は心配でしかたがなかったが、当番をはじめてするから大げさに考えたのかもしれない。そう思って毎日、当番の来るのをまっていた。

それから何日か、たって、きじは、あまりえさを食べないようになった。先生は、「このごろ、きじが元気がないようだが、だれか、えさを、やりすぎたんじゃないかな」といった。みんなは急にやかましくなった。

二、三日たって、きじは元気を取りもどした。みんなは、よろこんだ。先生は「みんな、えさに気をつけたから、元気を取りもどしたんだな」といった。

やがて私たちの当番の日が来た。とうきびをカナヅチでつぶしたり、なっぱをやったり、ふんを取ってやったりした。

つぎの日に学校に行くと、私たちの教室はやかましかった。言って見ると、みんなは、ひと所に集まって何か話していた。見るときじは死んでいた。みんなは「きのうの当番な、えさやりすぎたんでねえか」と小さい声でしゃべっていた。私はびっくりした。きのうの当番とは、私たちの事だ。でも、私たちは、えさをやりすぎたりなんか、しなかった。私たちは先生にしかられるかと思った。

やがて一限が始まり先生が来た。先生はきじが死んだ事をしっていたのか、びっくりした顔でもなかったようだ。

私たちの教室では、きじを、お墓へ持っていって土の中にうめた。

自転車 　小路　徹雄

八月の中ごろだったと思う。ぼくは、自転車で新聞を、取りに行った。おとな用だったのでのりにくかった。行きは、かんたんにいけた。帰りは、まず、新聞をはこんで自転車にのせて、ヒモでくくった。そして自転車を出した。

ぼくは、いい気になってペタルをふんでいた。そして、三つかどでの一時ていしゃを、しなかったとき、まっすぐ行くだろうと思った。オート三輪が急にまがってきた。ぼくは、急ブレーキをかけた。とたんに、「こら、あぶねがいや」と、ものすごくするどい声がした。ほんとにあぶなかったとは、そのときは、思わなかった。そしてしんぶんをはいたつして家にかえった。

家でかんがえてみた。あと二～三十センチまえに出ていたら、あと一秒早かったら、と思うとおそろしくなった。

それからは、一時ていしゃを、するように心がけている。そして交通事故がなくなる日がきたらいいなあと思う。それには一人一人が注意しなければならないと思った。

六　年　山本るり子

私が二年生の夏のとき、島根県へ行った。島根県には、一ヵ月とちょっといた。そのあいだ、そこの学校へ行っていた。いつも、友だちと、さつまいもや、おかしをもって海へ遊びに行った。

海は、静かなので、風の音やなみの音それから、私たちの声が聞こえて、昼は、にぎやかな海だ。

そして、鶴来から、お父ちゃんが来て、島根県をはなれ、鶴来へ帰った。

自転車 　片岡　光子

七月ごろ、わたしは、しんるいの、うちへいって自転車にのっていたら、石にぶつかって自転車といっしょに、ころがり落ちました。その時、くちの中に、すなみたいなものがはいっておったので、わたしはつばをだしたらしろいこまかなものでした。

しんるいのうちへいってかがみを見たら、前のはがかけていたのではずかしかった。

この間、新町のたたみやの前で、自転車のブレーキを、しめなかったので自動車と、ぶつかりそうになりました。その時、わたしは、ひかれてしまうのかとおもってびっくりしました。自動車にのっていた、うんてんしゅが、どこも、けがせんだかと聞いたので、わたしは、どうもなかったといって、ほかの子と自転車にのってうちへかえった。

ねことしょうとつ　山崎　三郎

高畠のじてんしゃをかりて、鶴来びょういんの木をまわってきました。東京パーマのそばで、ねこが、とびだしてきたので、ねことしょうとつして、ねこのはらをつぶした。ねこは「ギャー」とにげて行った。ぼくは、びっくりして、自転車をもってにげました。

ぼくのうちのまえへ行って、高畠に自転車をやってから、また東京パーマのそばへ行って見たら、ねこがうちの中にいたので、ぼくはあんしんして、うちへかえった。

交通事故　　作田とし子

兄ちゃんが、朝、七時半ごろ、会社に行こうとして、バスにあたったので、すぐまきの病院へ、はこばれていきました。医者が六ヶ月のじゅうたいだと言った。そのとき、会社の方から「金沢の中谷の医者に、みてもらった方がいいねか」と言ってきたので、考えて中谷の医者に行った。

そこの病院は、まだ、あたらしくたったので、けが人はまだひとりもいませんでした。一ばんに、はいったのが兄ちゃんでした。かんごふさんが二人で、お医者さんが一人でした。

兄ちゃんが、はいって、そのあくる朝、鶴来の、今町の人が手のひじをうって、前は鶴来病院にはいっていたけれど、この病院にはいてきました。

兄ちゃんが、はいって、三週間目に、私は兄ちゃんのところへいきました。土よう日にいって、日よう日の夕方かえりました。

そのつぎの、日よう日に、また兄ちゃんのときとへいったとき、まつばづえをついてあるいていました。そして、お正月に、一ぺん、うちへ、かえってきてもよいと先生がいったので、兄ちゃんは、十二月三十日に、かえってきました。そして一月五日の日に、かえっていきました。

そのあいだに、だいぶんの人が、びょういんにはいってきたので、そのとき、兄ちゃんは、きがねだから、一月二十四日の日よう日にたいいんしたのです。

中谷から、ほそ川へ、かよえるようにしてくれたので、兄ちゃんは、しばらくそこへかよっていましたが、二月のはじめに、しごとにいきました。

スキー　　加藤　昭二

一月 26 日だった、昼からスキーにのろうとしたら、新次が「のらんとゆきどかせ」といったので、かあちゃんにきいたらスキーにのってもいいといいました。「そのかわり、明日ゆきをどかせ」といったので、ぼくは「どかす」といって林へいきました。

こうしてはじめは下のほうからすべった。そしていちばん上からすべろうとおもって上へあがりました。はじめ、きもちがわるかったからちがう坂からななめにすべり下におりました。こんどは上からのろうと上がり、一番はじめにすべりました。下のほうへいってまがったらいきおいがついていたのでころびました。二～三回のってえいぼうが、千田の畑でのろうといったので、みんながいったのでぼくもいきました。そうして５～６回のって帰ろうと言ったのでみんなが行った。

ぼくがいちばんさいごになったので下のほうからすべりました。そうしたら前のほうへころび、つえがまえにささりました。そうしたら足がうしろへいってころんだときに足がねじてグキッといいました。ぼくは足がおれたのかとおもいました。

いたくてたてれませんでした。あんちゃんにおんぶしてもらって家へいきました。

ソフトボール

織田　勇雄

ぼくが、五年生のときの、先生は、なかなかいい先生だった。ソフトボールのしあいしているとき、ぼくは、ほけつでした。

ぼくらのくみは、まけていたが、ピンチヒッターがでるたびにかってきた。こんどは、もうまけないとおもって、みていたら、またまけてきた。あいてのチームはかってきた。こんどは、ぼくが「ピンチヒッターをせよ」といわれ、ライトをまもっていたとき、せんせいは、「がんばれ」といって、せいえんをくれた。そのときは、ぼくが「がんばるぞ」といって、ライトをまもったら、たまた、なんどもきたが、うまくさばいた。

そのとき、ぼくはもっとさきにだしてくれたら、もっとかっていたのにをおもった。

スキー

仲村　　章

きょう、小原の、スキー場で、スキーを、した。初めて、てっぺんの方でのった。のったら、少しいくと、かた足あがって、かた足でのったら、前へたおれそうになった。又、いくと、じゃんぷしにかかったので、ひざを前へやったら、飛ばなかったので、すーうっとした。とまるとき。曲ったら、ふんでなかったところへ、いったのでころんだ。また、上がった。上がるとき。横に、なって上がりました。上がっていると、上から、おとなの人が、すーっときて、ざっと曲がった。ぼくも、あんな、うまかったら、いいなあと、思った。もう一回、すべってころんだ。

ほかの人が、いっぱい帰ったので、ぼくらも帰りました。

みんな仲よく

山本千恵子

あそび時間のときでした。クラスの女の子たちが、かんけりをしていました。私は、「まって」と言いました。けれどもだれも、へんじをしませんでした。

ともだちが一人きてそのこも「まって」といったら、かんかりをしていた子が「あの子がいったらまってあげる。」と小声でいっていました。わたしはおもしろくなかったので、はなれてきたら、その子をまってやってかんけりをしていました。今、かんけりをしている子がほかのあそびに「まって。」と言って、へんじをしなかったらやっぱりいやなかんじがするでしょう。

昼のあそび時間、二組の女の子に「まって。」と言ったらまってくれた。わたしたちのクラスの子にまってといってもまってくれないのに二組の子たちがまってくれてうれしかった。

しばらくたった日、かんけりに「まって」といったらまってくれた。そしてほかの子がまってといってもまってやったのでこれからみんななかよく、べんきょうしたり、あそんだりたすけあってやったり、もらったりしてほしい。

思い出

宮岸千賀子

私が北の登代ちゃんと遊んでいる時だった。ふざけて、登代ちゃんをボンとおしたとたんに「ガチャン」と音がしたので、はっとして見ると、福岡先生のクラスの窓ガラスが一まいわれていた。クラスの生徒がいく人か、私のそばに、寄ってきて「これわったがあんたらか。」と、聞きながら、そのガラスを、かたずけて、くれました。私は顔が赤くなってきたので、登代ちゃんに「先生のとこ行って言うてこ」と、言いながら、かいだんをおりました。

私はおこられるかと、心ぱいしながら、福岡先生にそのことを話すと先生は「そんなら、ガラスをあぶなくないようにしまつしたら、受持の先生に話をして、教室に、はいるまっしね。」と言って、職員室に帰って、行かれました。

私はそのことを今でもはっきりと、おぼえています。今からは、そんなことをして、学校にめいわくをかけないようにしたいと思っています。

スキー

辻　　一代

きょうスキーにいったところ、はじめはころんでばかりいたけれどあとのほうになったらーかいしかころばなかった。あとになったらもうころばなくていちばんしたまでいったがかえりにひどくなった。

それに学校にきてから「さくぶんをかいてください」と先生がいわれた。みんながおしりがぬれたといっていた。わたしはかいているときからだがさむくなった。それに私はかぜをひいていなのにまだのこってかいていった。

もうかえろうかとおもったらはんせいかいがあった。

あぶないめにあったこと

土田　政明

一年のときだった。戦争ごっこをしていて、ちょうど、そのとき、足がすべったとおもったら、がけからころがりおちて、川の横で、しらぬまに立った。ぼくは、ふしぎで、しかたなかった。そうして、足をみたら、ぞうりがなかった。上から順番に、さがしてきてもなかったから、戦争ごっこをやめて、家にかえって、ぞうりを、かってくれとたのんで、やっと、かってもらった。ぼくは、いまかんがえてもふしぎでしかたなかった。どうして上からころがってたてたのかとおもうと、どうしてもわからないし、どんだけさがしても、ぞうりがわからないから、かんがえるのをやめた。

そのがけの上をとおると、翌一年のときよくおりたものだとおもってかんしんした。

ぼくは、いまおりるきもしない。

小さいころの時のできごと

表田　　勇

ぼくは、一年生の時、父ちゃんと「明法島へいく」といって家を出た。はじめせんばい所の所を通ったとき曲がろうとしたとき横から、小さい子がきて自転車の前へチョコチョコ出てきてぼくは急いで急ブレーキをかけた。小さい子は急いだように、どいた。

ぼくと父ちゃんは、又、自転車にのって、明法島へ明法島へといった。又少し行ったときに又曲る所でトラックがきて、ぼくは、びっくりして自転車をとめて、トラックをさきに通した。ぼくと父ちゃんは自転車を動かして、又明法島へとだんだん近づいていった。とちゅうに、バスが来て、すなボコリをボボにだして走っていくのを見たら不衛生だなと思いました。

ぼくと父ちゃんは、そのすなボコリの中を二人で自転車にのって明法島へと進んでいった。明法島へ行くとちゅうに村が三つある。

一つのむらでは、ニワトリが道ばたに出てきて、自転車もろくに動けないほど、チョコチョコと、せわくらしいがに動くので、ニワトリが、あっちの方へ行ったとき、ぼくと、父ちゃんは、そのすきを、うかがって、急いでそこを立去っていきました。その村の子どもたちが、ぼくの、自転車が、くさったがやといったのが、ぼくの耳にちらりとはいった。ぼくは、カッとなって、その場を出て、二つめの村へはいっていきました。

その二つめの村では、曲り角がたくさんあるので、いつなんどき曲り角から急に何が飛びだして、ぼくたちとぶつかってしまうかもしれないというスリル満点です。ぼくは、曲り角を、三辺ほど曲って、四辺めに、曲がったとき、曲がりきれなくて川に落ちました。小さな川なので、ズボンがぬれただけでよかった。ズボンはおじじの所へ行ってかわかそうと思って、自転車をおこして、ぼくと父ちゃんと又自転車にのって行きましたズボンが水にぬれていて重たいので、少し速さがにぶるのでおじじの所までいく、時間がおそくなるのでつまらなくてたまらなかった。

そして三つめの村にはいってきました。そこは、犬がたくさんいたので、ぼくたちはいそいでそこを、行こうといっしょうけんめいに、ペタルをふんでどうにか、三つめの村を、出てきました。

もうすぐそこに、明法島のおじじの家が見ていました。ぼくは、まだ小さいし、自転車はまだしんまいなので、おじじの所がみえたので、いそぎすぎてころんでしまって、足から血がでて、おじじの所へついて、てあてをしてもらってから、きょうのたびは冒けんだったと思った。

思い出

加藤　正子

学校へはいってから、はや六年間すぎさった。それまでいろんなことがありました。白峰にいたころ、雪がたくさんつもって学校にいく道が、ついていなかったら、お兄さんが、先にたって道をふんでくれました。それから、学校の上からは、白山が、きれいなので、時々、先生やお友達といっしょに、写生をしに行ったことがいまでも思い出します。

それから、秋になると、山々は、赤やきいろのもみじがきれいで日曜日に山にいって、おべんとうを食べにいったことも思い出します。また、悲しいこと　うれしいこと　ないたこともありました。また、いたずらをして、お母さんお父さんに、しかられたこともありました。いじめられてないたことも、ありました。

いまでも、弟をこもりしながら、かがみを見ていたら、もっていって、わらしてしまったので、私は、お母さんに、しかられるかなあと思ったけれども、話したらしかられなかったので、よかったなあ、とむねがスーッとしたことをいまでも思い出します。

そんなことをしているまに、小学校での六年間が、ゆめのようにすぎさってしまった。

あぶないめにあったこと　　後　　重晴

五年生のとき、おでん屋の所のみつかどの所へかおを出したら、ダンプカーがちょうどきた。よけようとしたらかんばんがじゃまになって、よけられなかった。そしたら、ダンプカーが、とまったので、ひかれそうだった。そしたら、中出の人が、「あぶなかったあと１０センチやったがいや」といった。あんまりはずかしかったので、あそびにいった。

そしてひがくれたので、家にかえったらしかられたのでいやなきもちになった。

小さいと言うこと　　長田　和子

小さいと、言うことは、たいへんつらいことです。私は、鶴来小学校へ、かわってきたくなかった。なぜかと言うと、背が、ひくいからです。

あちらの学校でも背がひくいために、人から、めとにされていました。私はこう思いました。「鶴来の学校へ、来ても、背がひくいから、みんなになにかいわれるだろうなあ」と、思っていました。

そのうち、一番はらのたったのは、四年生のＮという女の子が、私の目の前で、こういった。「あの子、私より背ひくいげんねえ」と、そばにいた女の子に言った。私はにくらしくてたまらなかったが、なんにも、文句は言えなかった。私は、今でも、その子がにくらしくてしかたがない。その子を見るたびに、私は、ぶってやりたいような気がしてしかたがないのだ。

小さいほうから、順にならぶことがあるが、ちょっとならばないで、ほかの子と話をしていたり、よそ見をしていたりしていると、大きい子は、「はよならばんかいね一番さきの子」と、言ったりするがそんなときは、大きい子が、小さい子をめとにしているように、思うのです。

私は、自分のからだが小さいからか、しらないが、私より年下の子とであったり、前にいたり、後ろにいたりすると、はずかしいからすぐに下をむく、くせがある。

私は、自分のからだが、小さいのにつくづくいやになった。

夏のある日　　井上　　章

ぼくは、朝、八時ごろにおきました。ぼくのおきたとき、まぼろしたんていをしていた。そしたら、かあちゃんが「あきちゃん、ごはんをたべて、べんきょうしなさい」といった。ぼくは、「ちょっと、おりさくくんのうちへいってくる」とかあちゃんにいいました。そして、おりさくくんのうちへいったら、だれもいなかった。そして、ぼくは、おりさくくんとこのうちのうらへいったら、おりさくくんとはたくんが、木をきっていました。そこには、はたくんとこの、とうちゃんもいました。はたくんのとうちゃんが、「いのうえくん、みねおのおるところへいかないか」といった。ぼくはだまっていました。そして、ちょっとたってから、おりさくくんが、「こい」といったから、ぼくはいきました。

おりさくくんとはたくんは、大きな木をきっていた。はたくんが、「ぼくにかわってくれ」といったので、かわってやりました。ずっと木をきっていたら、みずぶくろができました。

ぼくは、はたくんをよぶとき、「まあちゃん」といいます。まあちゃんが、みねおに「かわってくれ」といった。そしたら、みねおが「いや」といった。「まあちゃん、ぼくとかわってやる」と、ぼくがそういいました。ずっとしていたら、いたばかりになってしまった。うすいのやごついのがたくさんあった。

うすいいたならすぐに、われるけれども、ごついいただとわれない。そのごついいただけ、のこぎりできります。もうきれそうになると、かいだんのところにもってきて、みんなきるよりもすこしきって、足でわるほうがよっぽどいいとおもいました。うすいいたにくぎがでていました。そのいたがぼくの足の上におちました。ちいさいくぎなのであまり血はでなかった。まだごついいたが、二、三まいのこっていました。

そのいたをきっていたら、おやゆびを、すこしだけきりました。ぼくは、おりさくくんに、そのきったゆびや、足のことをいった。「おりさくだれにもいうな」とぼくはいったら、「うん」と言った。

ながいこと、まあちゃんが、木をきっていると、まあちゃんとこのおばばがもなかをひとつずつくれた。それからまた木をきりはじめた。そしたらひるの、サイレンがなりだした。はたのおばばが、「いのうえさん、ごはんをたべて、おいでね」といった。ぼくは、この木をきってからいくことにきめた。

そしてごはんをたべてから、かあちゃんにおかねを、もって、作文用紙をかいに、かさやまでいってきた。そしてその、作文用紙をつくえのうえにおいて、おりさくくんのところへいきました。

そしたらおりさくくんが、ごはんをすましてまんがの本をみていた。おりさくくんが、まんがをよみおわると、「いの、とらんぷせんか」といった。ぼくは「しょう」といいました。とらんぷをしていたら、はたのおばばがきて、さっきてつだいをした、おかねをくれた。ぼくはおりさくくんと、みせへいってキャラメルかってきた。

おりさくくんが、ぼくに、「かわらへいってこう」といった。ぼくは「おう」と、言った。「ついでにふるみやもいってこう」といったら、おりさくくんが「うん」と、言いました。かわらやふるみやへいっておもしろくなかった。

ぼくは、とうちゃんのところへ、じてんしゃをもらいにいきました。おりさくくんとぼくとが、二人で、じてんしゃにのってあそんでいました。

はたくんは、まだのこぎりをもって木をきっていました。ぼくはそれをみてもっとやりたいなと思った。だけど手に、みずぶくれがあったのでできなかった。

よるになるとおりさくくんはとこやにいった。ぼくもおりさくくんといっしょにいきました。おりさくくんが、頭のかるのがすんだら、本のたくさんあるところへいって、まんがの本をみていた。ぼくが、「おりさく、いこうさ」といっても、へんじをしなかったので、ぼくは、さきにうちにかえった。あとで、おりさくと、いっしょに、作文をかいてから、テレビを見てから、さいならをした。

私たちのクラス　　安田千代子

よそのクラスは、どうかしらないけれど私たちのクラスは、どうしてこんなにさわがしいのだろう。ま、私たちみたいなやかましい所は、どこにもないだろう。

小学校最高学年なのに、先生から「一年生より、わけが悪い」と、言われて、みんなはなぜはらがたたないのかと私は、ときどきはがくなってくる時がある。人がいっしょうけんめいになって注意しているのにちょっともきいてくれずに、知らん顔。なぜだろう。私たちは、もう六年生で、来年は中学なのに、こんなことで中学校に行ってもいいのだろうか。他の人はどう思っているのだろう。

けれど、私は、だめなのでは、ないかと思う。このまま、なおさないで中学へ行っても、今のように先生にしかられたりこごと言われるのでは、ないかなあと私は、思う。話合うと言っても、おしゃべりが多くて話合いをするよりも、注意する方が多いのですぐ時間がたってしまう。これじゃ時間をつぶすばかり。時間をつぶすなら、勉強でつぶしてほしい。

私たちは、みんなで「協力」と、言うことを決めたのではないか。それなのに、教室にせっかく自分の名前を入れて「協力」と、言う字を書いてあるのにふりむきもしない人がいる。もちろん、思いだして、協力している人もいると思う。みんながそんな心がけをしていると、もっともっとクラスがよくなるのではないかしら。もう少し「協力」と言うことを利用してもらいたい。きめたものをなぜもう少し実行していかないのだろう。書いていてもはらがたってくる。きめて実行できないものは、そんなことをきめなくていいのにと思う。

学級会を開いても、ろくに話がすまずに時間がきてしまう。みんながもっとおたがいに注意されないようにすればすぐきめられるのではないかと思います。人がせっかくいい意見を言っているのに、他の人は、さわがしくてきこうと思っているのにきけない人もいるのでは、ないかと思う。自分もそう言う身になってみればいいのに。そしたら少しは、他の人もわかるのではないかと思います。おたがいがもっと、気をつけていれば、その人たちに、めいわくが、かからないようになるのじゃないでしょうか。だれでも、一人一人が気をつけていないのでは、だめなのでは、ないかと思う。

私も、人の意見をきかないで、しゃべっていたことが何度も、何度もあった。けれど、これから気をつけていこうと思った。自分も、どんどん意見を言っていきたい。みんなも、どんどんぶつかっていったらいいのではないでしょうか。

思い出　　中田観世音

五年生の時だった。六月の中ごろ学校の授業が終わって、いよいよ家に帰る時は、教室に取り付けてあるマイクで、先生がたが、「近くの小さな川の水が道まであふれているから、気をつけて帰りなさい。」と言っていいた。ぼくは、もっともむりはない。あれだけ雨がふったのだからなあ……と、思いながら歩いていた。

そしていよいよ川のそばまで来た時は、どっちの道へ行った方が水がすくないかな、とまよった。道は二本あって、大通りの方は家に近いが、車が多く通るので、こんな時は、もう一つの道をつかおうと思ったが、大通りより少し水が多かった。しかし、このばあいどちらにしても、ぼくの長ぐつの中には水が入るだろう、と思われた。どうせ水が入るなら、あぶなくない道を行こうと、ズボンをひざまでまくって歩き出した。

役場の前まできた時は、もう長ぐつの中は水でいっぱい。行く手はまだまだ水でいっぱい。ぼくは、思わず「いやだなあ、こんなにごり水なんかどこかに飛んで行ってしまえ」とひとりごとを言って、たちどまっていたとき、左の方から「こっち、こっち」と、だれかが言った。ぼくが左を見たら、学校の先生がいて、その横を何人かが通って行く。先生はすぐに、「こっちは水が少ないから、そのしょうじをまっすぐ行きなさい。」と言った。

なるほど水は流れていなかった。ぼくは、山の雪がとけてこんな道まで、あふれたのだなあと、後ろをふりむきながら家へ帰った。

この事を思い出すたびに、きょ年は、こんなに雪がふらなかったのに、よく水があふれた。今年は雪がこんなにふったので、きょ年よりまだまだ、水がでるのじゃないかなあ、と、いつもあんじている。

とびばこ　　酒井外志子

私が六年になったとき、うけもちの先生は高鍬先生だった。二学期のある日のこと、体育の時間に、とびばこをすることになった。体育のうけもちも高鍬先生です。

五年生のときの体育のうけもちは、谷内先生でした。そのときは、あまりとびばこなどしなかったし、じょうずではなかったのでなおできなくなった。

六年になって、みんなのやっているのをみていると、したくなったので、やってみようと思ってとんだら、とびばこの半分ほどしかとばなかった。今度こそと思ってとんだら、とびばこの台からおちて、足をすりむいて、手をつっこんだ。けれども、足のいたいのがなおったけれども、手のつっこんだのがなかなかなおらなかった。先生に言って休んでいました。

体育の時間が終って、家に帰った。家でも手のいたいのがなおらなかった。そして、手があかくなって、あつくなってきた。お母さんが仕事から帰ってきたので、私はおかあさんに、「おかあさん、きょう学校で体育の時間にとびばこからおちて手をつっこんだわ。」と言ったら、おかあさんは、私の手にさわりながら言った。「いまもいたいの、手があつくなって、ねつをもっているんじゃないの、はやく医者へ行ってみてもらいなさい。」と言ったので、医者に行った。

道でさとるちゃんに会った。さとるちゃんは、「としちゃんどこ行くげ」と、聞いたので、私は、「牧野病院に行くの、さとるちゃんつんだってきて。」と言ったら、さとるちゃんはついてきてくれました。

病院には、二、三人しかいなかったので、私のばんはすぐにきた。しんさつ室の中にはいったら、とてもすずしかった。かんご婦さんは、ひやしぐすりをつけて、ほうたいをしてくれました。これで終わったかと思って、出ていこうとすると、かんご婦さんが、「まだですよ、ちゅうしゃもしなければならないのよ。それから、くすりももっていってください。」と言った。それで、いすにこしかけていると、かんご婦さんは、「ここにねて。」と言ったので、ねてちゅうしゃをしました。やっとすんで、外に出たら、うすぐらくなっていました。

こんなことがあったので、私は、とびばこをするのがこわくて、しかたがなかった。まりちゃんも、とびばこはきらいで、なかなかできなかった。けれども、まりちゃんは、いっしょうけんめいにれんしゅうをして、だいぶできるようになりました。

それで、私もやってみようと思って、とびばこの前まできたけれども、こわくなってきたのでやめた。すると、まりちゃんが、「としちゃん、そんなことしとったら、もっとできんがいね。私かってはじめおそろしかったけれども、できるようになったらおもしろいわ。」と言ったので、私もおそろしかったけれども、なんべんもれんしゅうをしました。そしたらすこしできるようになりました。

それで、まりちゃんとちいちゃんと私と辻さんとかっこちゃんと「明日またれんしゅうしょう。」と言った。先生にみてもらった。先生はしかたをおしえてくれました。

それからは、とびばこがきらいでこわかったのも、先生におしえてもらってからはすきになりました。私はこれも先生のためにうまくなったのだと、今も思っています。

詩

（先生記）

六年生で、詩の勉強は、ほとんどできなかったが、よい作品ができました。
これからも、ひまをみて、どんどん書きましょう。

スキー　　安田千代子

今日、スキーに行った　私は、ころんでばかりいた　でもおもしろかった
ころびながら下まで行く子もいた　私も、その一人だった
しばらく私は、上で見物だった　天気も上々だった
サーッ、サーッと　得意そうな顔をしてすべっている
私も、じょうずになって　早くあんなふうに、すべりたいなあ
スキーに行くと、いつも思う

草　　内尾　祥映

冬のあいだ、じーと土の中で　いきをこらして
春になって、めをだそうと　かまえている
草、だけではない　むしも、人間も　まっているのだ

ふろの中で　　山崎　二郎

ぼくはふろにいった　すごくたくさんいた
ぼくが場所をとったら、ぼくの横に二人ついた
ぼくはながくいないですぐさった　二人は、われがちにと場所をとりあった

スキー場で　　宮岸千賀子

小原のスキー場でスキーにのった　みんな、ぐんぐんスピードを出してきた
みんなを見ていると　私はうらやましくなってきた
とってもじょうずだ
スキーにのっているの見ていると
なだれみたいに、どうっと言う音をたてて、落ちてくる見たいだ
私も早く、あのようにスピードをだして　のれるように、ならないかなあ

かまくら　　織作　峰生

かまくらをつくる　ザクッとスコッパを雪の中につっこむ　そしてすてる
そうゆうことが　何回でもしてできるかまくら　へたをするとくずれる雪
できたかまくらの上から　あなをあける　かまどみたいだ
こうゆうかまどに　ごはんをたいたら　どれだけたけるか
いちどつくって　たいてみたい

詩　　松村　道子

私たち、もうここまできたんだね　六年間おなじ道を何度も歩いてきたんだね
小学校も、あと少しで卒業だね
中学校へいくと　小学校の事は、思い出になるんだね
私たちは中学校へ行く
「今日まで六年間いろいろな先生に勉強を教えてもらったね」
「ありがとう」
私たちは、もうすぐ中学校へ行くんだ

雪かき　　山本千恵子

大きい雪を川へほった　川はへいきでおし流す
こんどはとまるぞ　と思ったがまたながれた
おもしろくなってつぎつぎ流す　手にまめができた
でも家の前がきれいになるのでおもしろい
足のつめたいのもわすれて　どんどん流す

詩　　中木戸英夫

雪は、しんしんとふりつづいている
「早くはれないかなあ」
ストーブにあたりながら、ぼくは思う
ぼくの横には、スキーが、きちんと立ててある
「あっ、だんだん小ぶりになってきた。もうすぐ晴れるぞ‥‥
チェッ、またふってきた。雪のやつめ」

詩　　一鉄小百合

大きくなったら　スチュワーデスになりたい
国際線のスチュワーデスになって　スイス、オランダ、デンマーク
にいってみたい
高い高い空に上がって　外国の人達と　英語でペラペラしゃべってみたい

夜の空　　長田　和子

夜の空に星が光っていた　あの星はどこか、とおいとおい　ところから　光っているのだ
あんなにきれいな星が　ぼくはつすることが　あるのかなあ　と思うといやになる

詩　　早瀬　克人

ぼくの家の石油ストーブは　ばんごはんのあとにいつもたかれる
ストーブの前には　長ぐつが四そく
それは父、兄、ぼく、弟のものだ
雪おろしの日は　ジャンバとクツシタそれに手ぶくろ
ぐしゃぐしゃなのがほされる　へやは　それらのゆげでいっぱいだ

夕焼け　　加藤　正子

西の空が　赤くなった　夕やけを　じっと見た
東京へ　行っている　お兄さん
大阪へ　行っている　お兄さん
いまごろ　どうして　いるだろうなあ
東京へ　行っている　お兄さんは　いっしょうけんめいに勉強しているのが
夕やけの中に見るようだ
大阪へ　行っている　お兄さんは　いそがしそうに働いている
二人のおにいさんが　夕やけのそらをこえて見えるようだ

つらら　　小路　徹雄

やねから、ほそ長いつららがさがっていた
きそく正しい雨だれが、ポタ、ポタ、とおちている
その下に大きなあながあいている
あなは、黒く黒く下のほうまでつづいている
そこなしのあながあるようだ
そのあなは、雪をとかしあなをほり　土の上までとどき
どこかの川にとどき　流れているだろう
雪もとけ、もう春がくる　そのことをつたえるような音だ

たえる力　　仲村　澄子

やっと一つの門を出る事ができる
でも、まだまだ、いくつかの門が　大きく開いて、私たちをまっている
そしてその所々には　大きなしょうがい物もあるかもしれない
それにたえられるだろうか　いや、たえられだけの力を私たちが作ろう
みんなで力をあわせれば　きっと、しょうがい物も取り去れるだろう

ろうかを歩いていると　　北　登代子

雪のふる夜はさみしい
母と二人でろう下をあるいていると　ミシミシという
へんな音だ　私は母の手を　ぎゅっとにぎった

スキー　　中村　久幸

学校からスキーにいった　スキーをはいて上にいった
ぼくはスキーにのってすべりおりた
はんぶんごろまできたら　またがひらきズボンがやぶけました
後くんにスキーをとめるものをかりて　とめました　はずかしかった

はいく

白い雪　白い犬らも　黒く見え
寒い朝　新聞くばり　手がうずく　　根崎　明義

ちらちらと　雪のふる中　ひとり行く
ストーブの　けむりが雪を　そめるかな　　宮　　要介

ブルトーザーが　除雪する道　屋根ぐらい　　早瀬　克人

学級担任

一年	小石　春栄	向　　菊枝	加藤　淑子
二年	向　　菊枝	藤島サチ子	大西ふみ子
三年	山本　　工	堀　富士磨	大西ふみ子
四年	中本　博子	福岡　克己	江村喜久治
五年	谷内　善一	東　眞喜雄	藤島サチ子
六年	北川　与孝	高鍬　敏之	津田　正子

・・・・・・編集記・・・・・

古希を迎えるにあたって、身辺整理？じゃないが、物置きにある古いアルバムや写真を整理しようとガサゴソやっていたら、亡き母が私の結婚当時に渡してくれた古い段ボールの中から、アルバムや写真と一緒に、この文集が出てきた。

懐かしいガリ版印刷のもので、当時の先生方の苦労が染みついた文集だ。色褪せてセピア色の紙面で、読んでいるうちに生徒各々の思いが綴られており、当時の懐かしい記憶が蘇ってきた。

編集にあたっては、文集に書いてある文を有りのままに転記した。「字下げ」「ぶら下げ」等はある程度、編集しやすいように編纂した。また、「・・・・でせう。」や「・・・のやうだ。」は「・・・しょう。」や「・・・・のようだ。」に変換した。

文集における各組の編集が若干違うのは、多分、一、二、三組での各先生がそれぞれ、当時、慣れない活字を拾って、ガリ版印刷をしたのだろう。

六年三組　織作　峰生

※転記にあたって、文書校正等の作業は行っておらず、間違い等は編集者の打鍵ミスということで、ご容赦下さい。

また、漢字変換は一部間違いが見受けられますが、そのまま記載しました。

（例：教壇⇒教段等）

？？　野村　小石　又　藤本　？？　？？　尾島　？？　粟田　？？　？？　？？
？？　山本　柿　？？　？？　？？　？？　魚住　北村　小坂　安田　？？
長森　山元　中村　？？　寺田　戸田　酒井　沢田　小西　？？
森山　西田　？？　？？　？？　北川先生　？？　山岸　木下　浅井　？？

？？　成田　辻　松本　？？　？？　大崎　鈴木　畑　？？　？？　山田　戸田
吉川　作田　梶　富田　谷口　？？　今西　？？　？？　？？　藤本　？？
？？　吉岡　常山　村田　常岡　小西　橋場　吉村　三国　橋本　米田
南谷　？？　木呂場　？？　？？　津田先生　？？先生　吉本　？？　？？　山崎　杉田

写真：後

織田　井上　中木戸　加藤　山本　小山　土谷　内尾　小路　織田　榊原　早瀬
松村　安田　密谷　山本　宮岸　作田　一鉄　大崎　山岸　山本　喜多　酒井
表田　中田　中村　高畠　中村　山橋　坂井　山崎　宮　織作　根崎　土田
長田　加藤　北出　藤場　片岡　江村先生　高鍬先生　仲村　辻　北　車　上田